

トノバセ遺跡 2

福岡県春日市大谷所在の遺跡

春日市文化財調査報告書 第55集

2009

春日市教育委員会

トノバセ遺跡 2

福岡県春日市大谷所在の遺跡

春日市文化財調査報告書 第55集

序

春日市は福岡市の南に隣接し、昭和47年の市政施行以来、福岡市のベッドタウンとして都市化が進みました。同時にかつての農地や山林は宅地として開発されてきました。そして、これらの開発に伴い遺跡の発掘調査が行われ、貴重な文化財が多く確認されることになりました。特に春日丘陵北部には須玖岡本遺跡を中心とする須玖遺跡群があり、弥生時代の奴国の中心地として栄えていたことが窺えます。

本書はこの須玖遺跡群の南辺に位置するトバセ遺跡の発掘調査報告書です。トバセ遺跡の周辺では弥生時代の集落を囲む環濠を検出した大南遺跡や、銅剣、銅矛、銅鐸の青銅器鑄型が出土した大谷遺跡などがあり、弥生時代の集落形成を考える上で重要な遺跡の一部であるといえます。

本書が埋蔵文化財への理解を深める研究資料として活用され、また市民の皆様に郷土の歴史を知る一助となれば幸いです。

最期になりましたが、発掘調査に際しご指導ご協力を賜りました方々に深く謝意を申し上げます。

平成21年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山 本 直 俊

例 言

1. 本書は、1998年4月6日から同年6月9日（3次調査）及び、同年10月6日～同年11月6日（4次調査）にかけて春日市教育委員会が実施したトバセ遺跡3・4次調査の報告書である。
2. 遺構の実測は森井千賀子が行い、製図は須崎葉津子が行った。
3. 遺物の実測は末田敬子、吉富千春、境靖紀、森井が行い、製図は森井が行った。
4. 掲載した写真のうち、遺構については（有）空中写真企画、森井が撮影し、遺物については岡紀久夫（文化財写真工房）が行った。
5. 本書に使用した2万5千分の1の地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』（1991年）である。
6. 本書の遺構実測図に用いた方位は磁北である。
7. 土層断面観察の記載について、土色は小山正志・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1996年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
8. 本書の執筆、編集は森井が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	5
1	3次調査	5
(1)	第1面（上層）の遺構	5
(2)	第2面（下層）の遺構と出土遺物	5
①	土壌	6
②	溝	6
③	包含層	7
④	出土遺物	8
(3)	小結	16
2	4次調査	17
(1)	弥生時代の遺構と出土遺物	17
①	竪穴住居跡	17
②	土壌	21
③	溝	23
④	出土遺物	24
(2)	古墳時代の遺構と出土遺物	28
①	竪穴住居跡	28
②	出土遺物	29
(3)	歴史時代の遺構と出土遺物	30
①	竪穴住居跡	30
②	溝	35
③	出土遺物	35
(4)	小結	36
IV	まとめ	36

図 版 目 次

- 図版1 1 トバセ遺跡3次調査 調査区東部（第1面）全景（北から）
2 調査区中央部（第1面）全景（北から）
3 調査区西部（第1面）全景
- 図版2 1 調査区中央部（第2面）北側全景（北から）
2 調査区中央部（第2面）南側全景（北から）
3 調査区西部（第2面）全景
- 図版3 1 1号土壙（南西から）
2 1号溝弥生土器出土状況
3 1号溝全景（南から）
- 図版4 1号溝出土土器
- 図版5 1・2号溝出土土器
- 図版6 包含層出土土器・陶磁器・石器・鉄器
- 図版7 1 トバセ遺跡4次調査全景
2 3号住居跡（北から）
3 3・4号土壙（北東から）
4 1号住居跡（北から）
- 図版8 1 2号住居跡完掘状況（西から）
2 2号住居跡土器出土状況（西から）
- 図版9 1 2号住居跡竈検出状況（西から）
2 2号住居跡煙道検出状況（西から）
- 図版10 1 5号土壙（南西から）
2 6号土壙（西から）
3 調査区近景（北東から）
- 図版11 3・4・7号住居跡、ピット出土土器、土製品
- 図版12 3・4号住居跡、包含層出土石器、鉄器、1号住居跡出土土師器、土製品、韃羽口
- 図版13 2号住居跡出土土師器、須恵器

挿 図 目 次

第1図	トバセ遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図	トバセ遺跡位置図(1/2,500)	4
第3図	トバセ遺跡3次調査遺構配置図 (第1面) (1/150)	6
第4図	トバセ遺跡3次調査遺構配置図 (第2面) (1/150)	7
第5図	1号土壙実測図 (1/40)	8
第6図	1号溝土層断面実測図 (1/40)	8
第7図	2号溝土層断面実測図 (1/40)	8
第8図	1号土壙出土弥生土器実測図 (1/4)	8
第9図	1号溝出土弥生土器実測図 (1/4)	9
第10図	1・2号溝出土弥生土器実測図 (1/4)	10
第11図	包含層出土弥生土器実測図 (1/4)	12
第12図	包含層出土弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器実測図 (1/4・1/3)	14
第13図	2号溝・包含層出土石器・鉄器実測図 (1/2)	15
第14図	トバセ遺跡4次調査遺構配置図 (1/100)	17
第15図	3・4号住居跡実測図 (1/40)	18
第16図	5・7号住居跡実測図 (1/40)	19
第17図	6号住居跡・1号土壙実測図 (1/40・1/20)	20
第18図	2・3・4号土壙実測図 (1/40)	22
第19図	5号土壙実測図 (1/40)	23
第20図	6号土壙実測図 (1/20)	24
第21図	3・4・7号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)	25
第22図	ピット出土弥生土器実測図 (1/4)	26
第23図	4・5号住居跡出土土製品実測図 (1/2)	27
第24図	3・4号住居跡出土石器実測図 (1/2)	27
第25図	3号住居跡出土鉄器未製品実測図 (1/2)	27
第26図	包含層出土石器、鉄器実測図 (1/2)	28
第27図	1号住居跡実測図 (1/40)	29
第28図	1号住居跡出土土師器・土製品・鞆羽口実測図 (1/3・1/2)	30
第29図	2号住居跡実測図 (1/40)	31
第30図	2号住居跡竈・煙道実測図 (1/20)	32
第31図	2号住居跡出土須恵器・土師器実測図 (1/3)	33
第32図	2号住居跡出土土師器実測図 (1/3)	34
第33図	3号溝出土土師器・石製品実測図 (1/3・1/2)	35

I はじめに

1 調査に至る経過

トバセ遺跡（3次調査）は共同住宅建設に伴う緊急発掘調査である。対象地の地番は福岡県春日市大谷3丁目106-1で、開発に先立ち埋蔵文化財事前調査依頼書が提出され、1997年6月25日に試掘調査を行った。その結果、対象地全体に遺構が確認されたため、翌年度の当初から受託事業として本調査を実施することとなった。発掘調査は1998年4月6日から開始し、同年6月9日に終了した。

トバセ遺跡（4次調査）は3次調査の調査原因となった共同住宅の駐車場建設に伴う緊急発掘調査である。対象地の地番は福岡県春日市大谷3丁目69で、開発に先立ち埋蔵文化財事前調査依頼書が提出され、1998年5月15日に試掘調査を行った。その結果、駐車場予定地の南部は東側の丘陵が西に突出した部分であり、すでに地山まで削られていたため遺構は存在しなかった。駐車場予定地の北部は一段低く、畑として利用されていた。この部分において遺構が確認されたため、受託事業として本調査を実施することとなった。発掘調査は1998年10月6日から開始し、同年11月6日に終了した。

2 調査の組織

発掘調査を行った平成10年度、報告書刊行の最終的作業を行った平成20年度の調査の組織は以下のとおりである。

発掘調査（平成10年度）

教 育 長 河鍋好一
教 育 部 長 柴田利行
文化財課長 井上武美
文化財課長補佐兼管理係長 桑野浩行
管理係 事務主査 増永睦司
同 事務主査 北島公則
同 事務主査 十時弘之
文化財係 係 長 丸山康晴
同 技術主査 平田定幸
同 技術主任 中村昇平
同 技術主任 吉田佳広
同 技術主任 森井千賀子
同 技 師 境靖紀
同 嘱託職員 清永久仁子
同 嘱託職員 石木晴香

報告書作成（平成20年度）

教 育 長 山本直俊
社会教育部長 箕原三郎
文化財課長 古賀俊光
文化財課長補佐兼管理担当係長 白水心子
管理担当 主 査 塩足雅弘
同 主 任 山田ひとみ
文化財担当 係 長 平田定幸
同 主 査 吉田佳広
同 主 査 森井千賀子
同 主 任 井上義也
同 嘱託職員 吉田浩之
同 嘱託職員 長谷部真弓

II 遺跡の位置と環境

トバセ遺跡は福岡県春日市大谷3丁目に所在する。脊振山地北側斜面の牛頸山（標高448m）から北に派生する春日丘陵上の西斜面に位置する。春日丘陵は那珂川と牛頸川の間で、これらの河川にそそぐ小河川によって開析され、樹枝状に小さな谷が入っている。トバセ遺跡はこの春日丘陵の西側斜面にあるが、西側には諸岡川が流れ、東側には樹枝状の小さな谷が入ることから、東西を谷で挟まれたやや小高い位置に遺跡がある。地質学的には高位段丘面から中位段丘面との境にあたる。

周辺の遺跡分布は、春日丘陵北端には弥生時代の有力なクニの一つである「奴国」の中心的な遺跡である須玖岡本遺跡をはじめ、南北約2km、東西約1kmの範囲に弥生時代中期～後期を中心とする集落や墓地が密集している。この遺跡群を「須玖遺跡群」または「須玖岡本遺跡群」と称する。トバセ遺跡はこの須玖遺跡群の南に位置するが、トバセ遺跡東側の小さな谷を隔てて大南遺跡、東南に大谷遺跡がある。大南遺跡は三叉状の支丘上に弥生時代中期の竪穴住居跡8軒、後期の竪穴住居跡94軒が発掘され、この三叉状の支丘の西から南にかけてV字溝が巡る。この溝は出土土器から中期に掘削され後期まで使用されている。大南遺跡の東南に隣接する高辻E遺跡では大南遺跡のV字溝に続く想定される溝が検出されている。大谷遺跡は西方に開いた馬蹄形の支丘上に中期から後期の竪穴住居跡が検出された。大谷遺跡は丘陵の尾根部を削平し、平坦面を拡大して集落を形成していることから大規模な造成が行われたことが伺える。林田遺跡（旧大谷北遺跡）はトバセ遺跡がある支丘の尾根上に位置し、尾根上の北端で行われた発掘調査では、中期から後期の竪穴住居跡が16軒と中期後半の甕棺墓が3基検出されている。また、諸岡川を挟んで西側丘陵上には一の谷A～C遺跡、宮の下遺跡がある。一の谷A～C遺跡は弥生時代前期末から中期にかけての竪穴住居跡や貯蔵穴、中期を主体とする甕棺墓が検出されている。また、宮の下遺跡は中期前半から後期前半にかけての墓地で、副葬品を有する墳墓が複数存在し、有力な集団の墓地であるといえる。

古墳時代になると集落は散見されるものの数は多くない。また墳墓も弥生時代の墓地とほぼ同じ地点にみられ、大谷遺跡では古墳が14基確認されている。一の谷遺跡では丘陵上に方墳が1基、周溝墓が5基検出されている。宮の下遺跡も方墳3基、円墳1基が確認されている。

飛鳥時代以降は集落については大南遺跡で奈良時代と思われる掘建柱建物跡があり、トバセ遺跡2次調査でも竪穴住居跡が検出されている。諸岡川沿いの谷部は大土居水城跡の存在からしても古代の要路であるといえるが、諸岡川沿いでトバセ遺跡の北に位置する赤井手遺跡からは百済系短弁軒丸瓦が出土しており、須玖岡本遺跡盤石地区においても百済系短弁軒丸瓦を伴う掘建柱建物跡が検出されている。特に須玖岡本遺跡は古代官道の通過地点が推定されることから、官衙的施設が周辺に存在する可能性が高いといえる。

引用・参考文献

春日市史編纂委員会 1995『春日市史』上巻

春日市教育委員会2003『春日市埋蔵文化財年報10』



第1図 トハセ遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|------------|-----------------|-------------|
| 1 須玖黒田遺跡 | 21 上散田遺跡 | 41 堂園遺跡 | 61 警弥郷B遺跡 | 81 一の谷B遺跡 | 101 向野遺跡 |
| 2 須玖楠町遺跡 | 22 袖ノ木A遺跡 | 42 大南B遺跡 | 62 下白水大塚古墳 | 82 原田B遺跡 | 102 大土居水城跡 |
| 3 須玖唐梨遺跡 | 23 赤井手遺跡 | 43 藤波遺跡 | 63 下立頭遺跡 | 83 原田C遺跡 | 103 天神山水城跡 |
| 4 智者ヶ本遺跡 | 24 平若B遺跡 | 44 豆塚山遺跡 | 64 重久遺跡 | 84 原田A遺跡 | 104 池ノ内遺跡 |
| 5 須玖五反田遺跡 | 25 平若C遺跡 | 45 原町遺跡 | 65 天神免遺跡 | 85 高辻A~C遺跡 | 105 天神ノ木遺跡 |
| 6 須玖永田遺跡 | 26 袖ノ木B遺跡 | 46 紅葉ヶ丘遺跡 | 66 先の原B遺跡 | 86 ラビラオ遺跡 | 106 池ノ内B遺跡 |
| 7 須玖永田B遺跡 | 27 石橋遺跡 | 47 横手遺跡群 | 67 立石遺跡 | 87 小倉池の下遺跡 | 107 整理池遺跡 |
| 8 須玖坂本B遺跡 | 28 竹ヶ本B遺跡 | 48 寺島遺跡 | 68 西ヶ浦遺跡 | 88 先の原・春日公園遺跡 | 108 ウトグチB遺跡 |
| 9 須玖タカウタ遺跡 | 29 竹ヶ本A遺跡 | 49 笠拔遺跡 | 69 西平塚遺跡 | 89 小倉水城跡 | 109 ウトグチC遺跡 |
| 10 須玖尾花町遺跡 | 30 竹ヶ本C遺跡 | 50 日佐遺跡群 | 70 高辻D・F遺跡 | 90 古水遺跡 | 110 百堂遺跡 |
| 11 須玖岡本遺跡 | 31 クミイヶ遺跡 | 51 上日佐遺跡群 | 71 大南A遺跡 | 91 日拝塚古墳 | 111 原遺跡 |
| 12 岡本ノ上遺跡 | 32 仁王手B遺跡 | 52 浦田遺跡 | 72 高辻E遺跡 | 92 石尺遺跡 | 112 惣利1号察跡 |
| 13 野添遺跡 | 33 寺屋敷B遺跡 | 53 上ノフヶ遺跡 | 73 大谷遺跡 | 93 寺田・長崎遺跡 | 113 惣利遺跡 |
| 14 須玖盤石遺跡 | 34 寺屋敷A遺跡 | 54 林添遺跡 | 74 林田遺跡 | 94 辻畑遺跡 | 114 惣利西遺跡 |
| 15 上平田・天田遺跡 | 35 西方遺跡 | 55 中ノ原遺跡 | 75 トハセ遺跡 | 95 中白水遺跡 | 115 大牟田遺跡 |
| 16 下大荒遺跡 | 36 サヤノマ工遺跡 | 56 古ノ野上遺跡 | 76 宮の下遺跡 | 96 門田遺跡 | |
| 17 大荒遺跡 | 37 伯玄社遺跡 | 57 日佐原遺跡 | 77 飛背遺跡 | 97 柏田遺跡 | |
| 18 大坪遺跡 | 38 松添遺跡 | 58 川久保遺跡 | 78 寺田池北遺跡 | 98 今光・地余遺跡 | |
| 19 草野遺跡 | 39 ナライ遺跡 | 59 川久保B遺跡 | 79 一の谷A遺跡 | 99 宗石遺跡群(貝徳寺古墳) | |
| 20 平若A遺跡 | 40 仁王手A遺跡 | 60 警弥郷A遺跡 | 80 一の谷C遺跡 | 100 下原遺跡 | |



第2図 トバセ遺跡位置図 (1/2,500)

Ⅲ 調査の概要

1 3次調査

トバセ遺跡ではこれまで2次調査が行われている。1・2次とも春日丘陵内で枝状に延びる小丘陵の西側で諸岡川との間に位置し、標高は29m前後を測る。1次調査では弥生時代後期の溝が検出されている。2次調査は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡で、弥生時代の溝、土壇、古墳時代の住居跡、奈良時代～中世は溝、土壇を検出している。1・2次調査で墓は検出されておらず、集落の中で居住域にあると想定される。対象地は、発掘調査前は畑として利用されていたが、それ以前は水田であったとのことである。

3次調査は1次調査の北側隣地、2次の南側隣地で、1・2次調査区に挟まれていることから、1・2次調査で検出された溝に継続する遺構が検出されると想定した。

発掘調査は、平成10年4月6日から重機による表土剥ぎを行い、西側から遺構検出を開始した。対象地内で十分に土置き場が確保できなかったため、調査区を西部、中央部、東部の3区に分け調査を行った。西部より調査を開始したが、西部、中央部では遺構面が2面確認されたので、第1面（上層）と第2面（下層）にわけた。

第1面（上層）は奈良時代以降と思われる遺構面で、検出した遺構はピット、溝8条である。第2面（下層）は弥生時代の遺構で、検出した遺構は溝2条、土壇1基、ピットである。出土遺物はパンコンテナ14箱で、その多くは包含層出土の弥生土器である。

遺構検出および記録作成後、埋め戻しを行い6月9日に調査を終了した。

(1) 第1面（上層）の遺構（図版1 第3図）

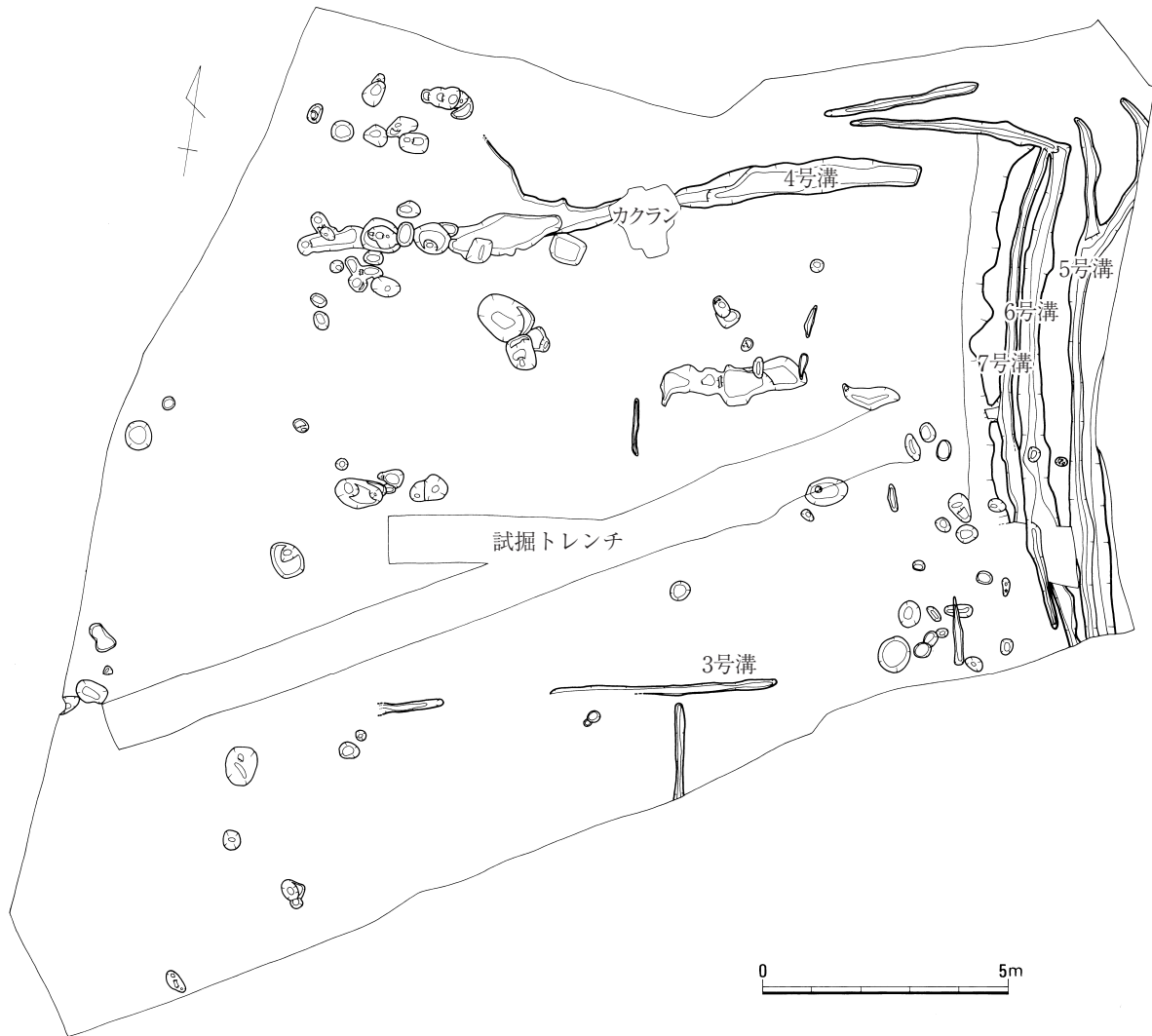
対象地は調査時にはすでに宅地造成がなされ、現地表面から深さ約55cmまでは盛土（マサ土）があった。盛土を除去すると、畑の耕作面、水田耕作面が堆積し、現地表面から深さ約110cmで遺構面に達した。丘陵の山側である東部では、遺構面は1面のみで、中央部から西部にかけて包含層が堆積し、遺構面を2面確認した。遺構検出面の東西方向の比高差は約45cmである。

溝は南北方向と東西方向の二方向に延びているが、その深さはすべて10cm未満と浅く、東西方向に延びる溝は両端とも調査区内でとぎれた。南北方向に延びる溝は等高線と平行に溝が延びることから、水田に付属する溝と思われる。P21からは須恵器の高台付椀の細片が出土しており、その埋土には炭化物が多く含まれていた。

調査区の東端には包含層の堆積はみられず、2次調査では包含層が約40cm堆積していた状況とは異なる。水田経営時に土地を開墾する際に切土したためと思われる。

(2) 第2面（下層）の遺構と出土遺物（図版2 第4図）

第2面（下層）では、溝2条、土壇1基、ピットを検出した。第1面から深さ約10～15cmの厚さ



第3図 トバセ遺跡3次調査遺構配置図（第1面）（1/150）

の包含層が堆積し、この包含層を除去すると第2面（下層）に達した。包含層出土遺物は第1面と第2面との間から出土した遺物である。

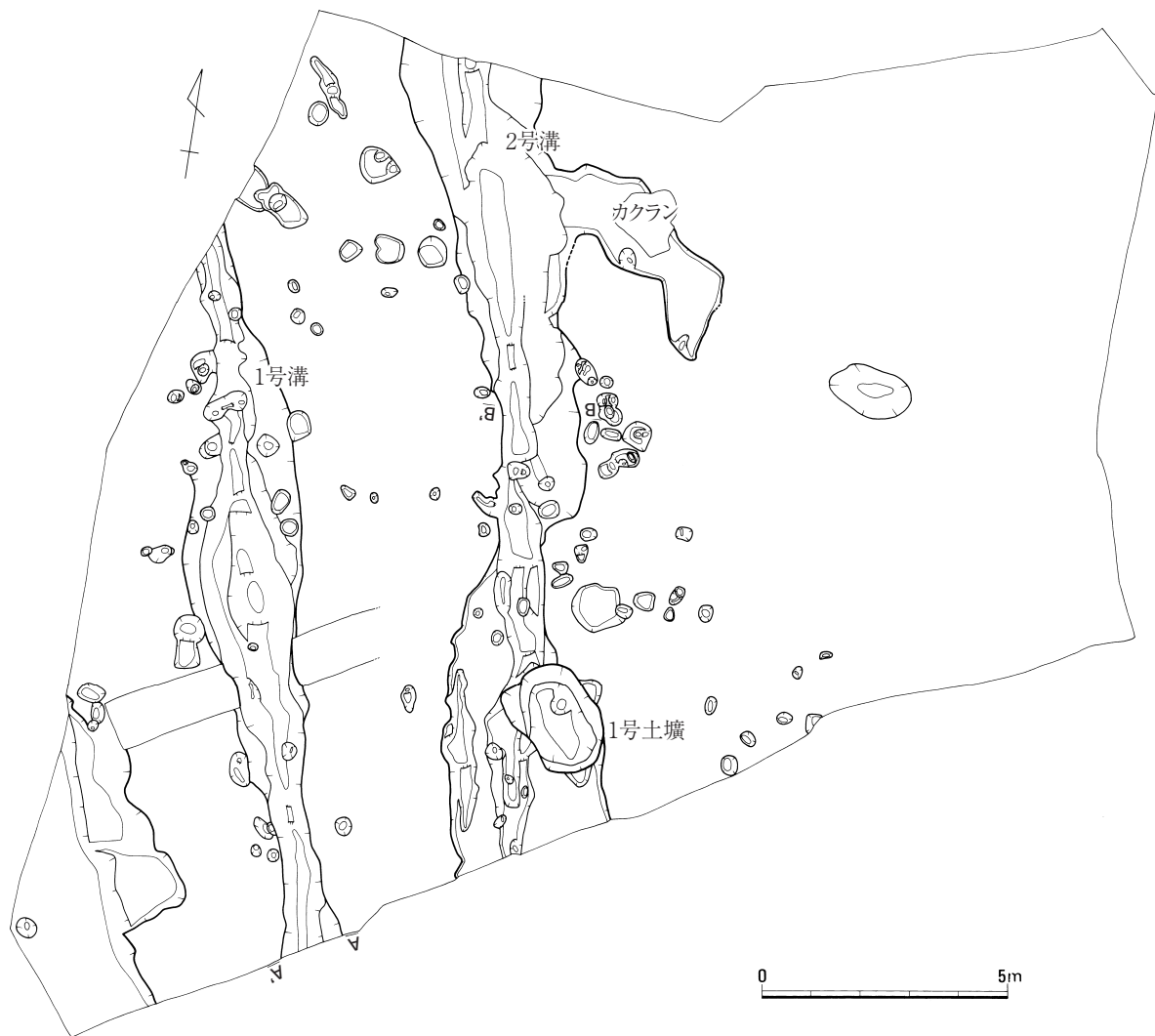
① 土壙（図版3-1 第5図）

1号土壙は調査区西部の南側で検出した。楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。底面にはピット状の窪みがある。2号溝を切る。出土遺物は弥生土器がある。

② 溝

1号溝（図版3-2・3 第6図）

1号溝は幅約70cm、深さは60～70cmで北側から南側に向かって深くなっている。また、調査区の中央では溝の幅が約210cmと広くなり深さも90cmと深くなる。1号溝出土土器の多くはこの溝幅が広がった部分から出土したもので、ここから出土した土器の時期は弥生時代中期末である。1次調査の1号溝に継続する溝と考えられ、北側に向かって現地表面からの深さが浅くなることから、2



第4図 トバセ遺跡3次調査遺構配置図（第2面）（1/150）

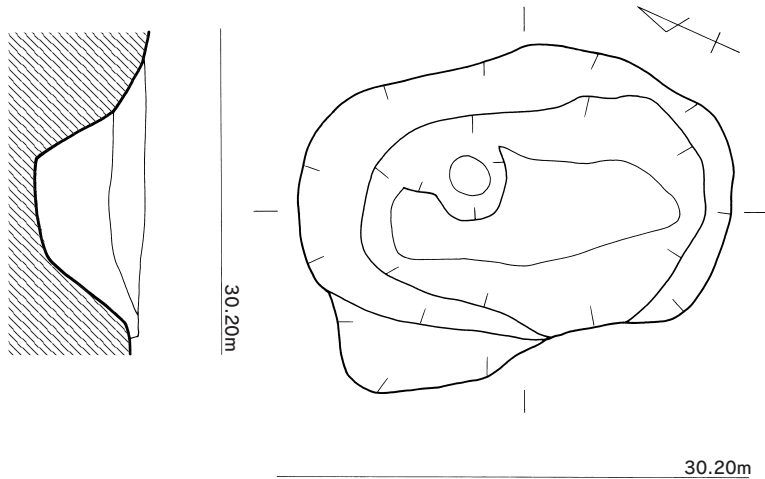
次調査では後世の削平によって検出されなかったといえる。出土遺物は弥生土器がある。

2号溝（第7図）

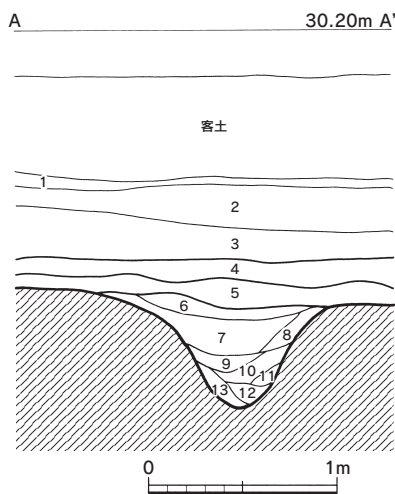
2号溝は幅約0.8～2m、深さは一様ではなく0.2～0.5mで、所々水たまりのように窪んでいる。また、深さが北側の方が南側より深くなっており、1号溝とは傾斜が異なる。1号溝とほぼ平行に延びる。出土遺物から2号溝の時期は弥生時代中期末で時期差はほとんどないが、1号溝と同時に使用されていたかは不明である。2号溝は2次調査の3・4号溝に継続する溝と考えられる。出土遺物は弥生土器がある。

③ 包含層

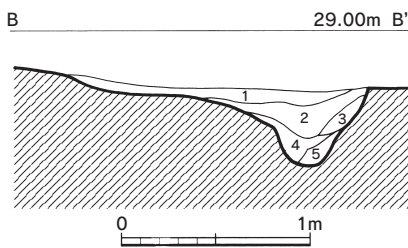
包含層は第1面の下で、第2面との間に深さ約10～15cmの厚さで堆積していた。包含層出土遺物は第1面と第2面との間から出土した遺物である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器がある。



第5図 1号土壙実測図 (1/40)



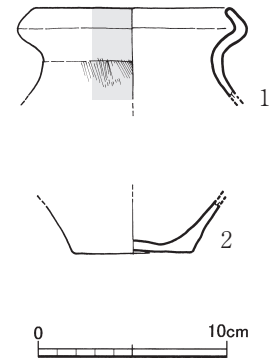
第6図 1号溝土層断面実測図 (1/40)



第7図 2号溝土層断面実測図 (1/40)

- 1 灰色(5Y4/1)土
 - 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 1~3mm前後の砂粒を非常に多く含む
 - 3 灰色(5Y4/1)+黄褐色(10YR5/6)土 粗砂を非常に多く含む
 - 4 黒褐色(7.5YR3/1)土 粗砂を非常に多く含む
土器を少し含む(包含層)
 - 5 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 土器を含む(包含層)
 - 6 黒褐色(10YR3/2)土 粗砂を非常に多く含む(溝1上層)
 - 7 褐灰色(10YR4/1)砂質土
 - 8 褐灰色(10YR4/1)土 粗砂を非常に多く含む
 - 9 7とほぼ同じ。7より砂質
 - 10 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
 - 11 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土(ややシルト質)
 - 12 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
 - 13 黄灰色(2.5Y4/1)砂土(粗砂)
- *7~13は溝1(下層)

- 1 黒褐色(10YR3/1)土 粗砂を多く含む
- 2 黒褐色(10YR3/2)土 粗砂を非常に多く含む
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)土 粗砂を多く含む
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)土 粗砂を多く含む
- 5 褐灰色(10YR4/1)砂質土 粗砂を非常に多く含む



第8図 1号土壙出土
弥生土器実測図 (1/4)

④ 出土遺物

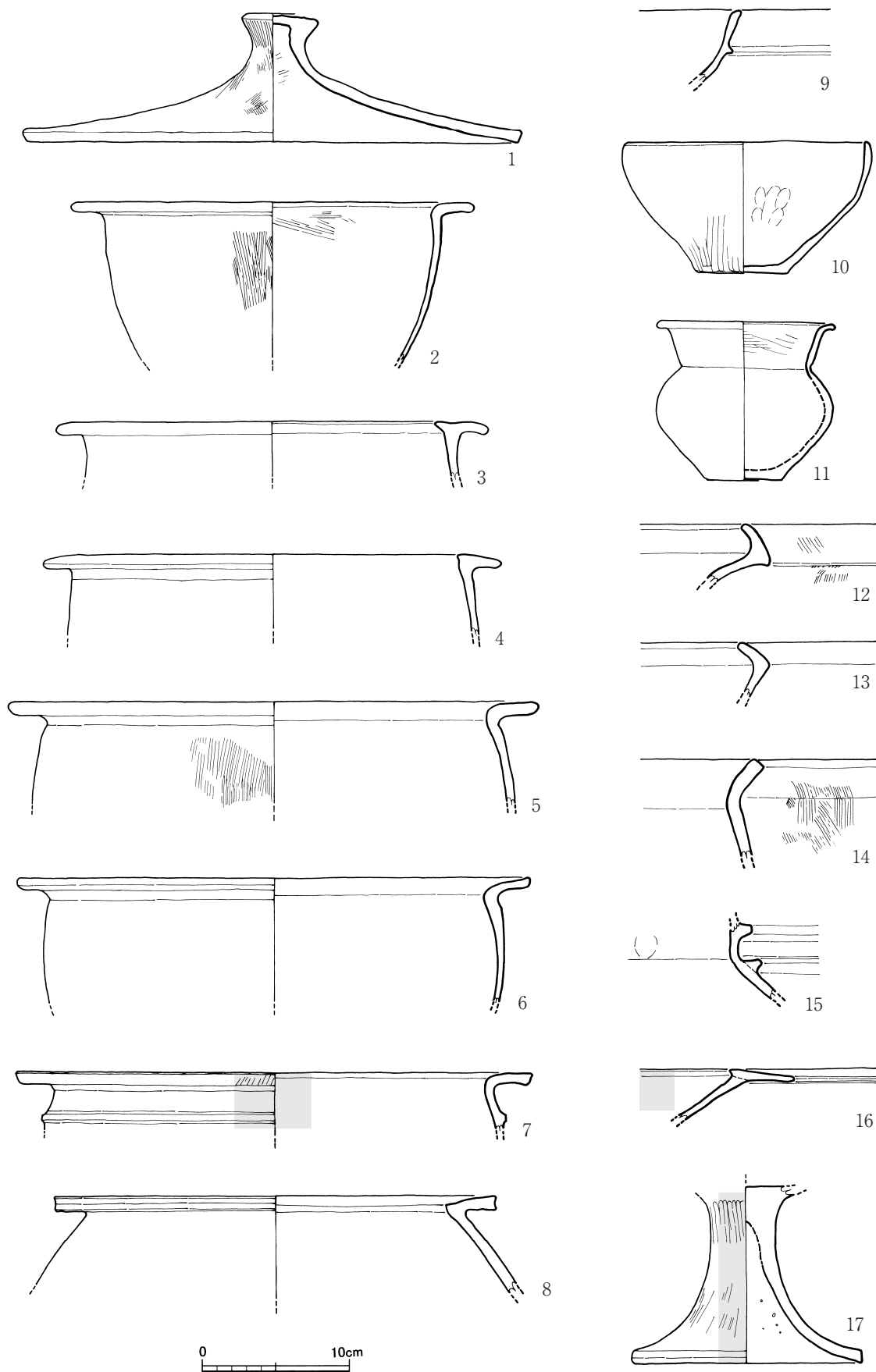
土器、陶器、陶磁器

1号土壙出土土器 (第8図)

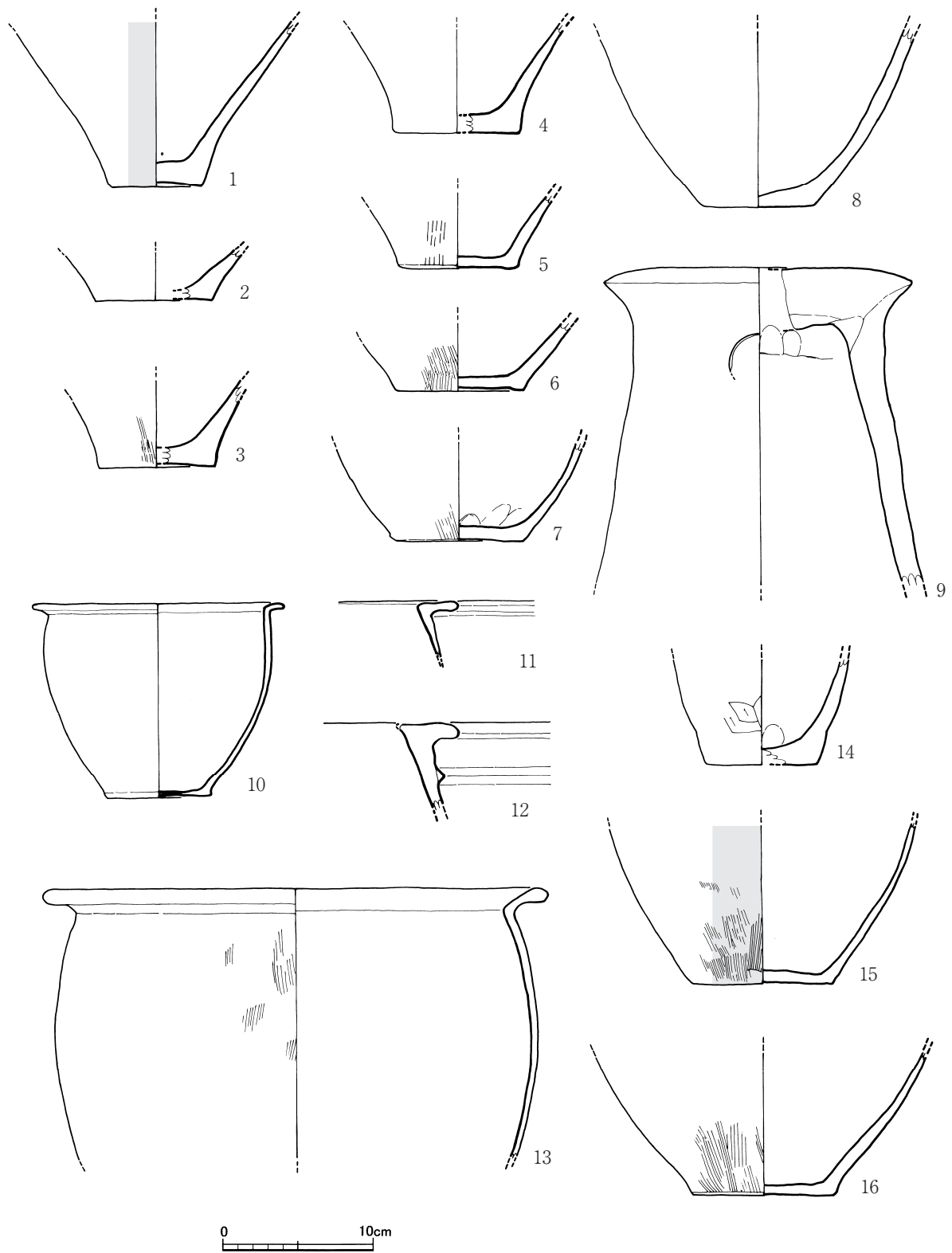
1は袋状口縁壺の口縁部破片で復元口径は13.0cmである。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。頸部外面はタテハケ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整である。外面には丹塗り痕がある。2は甕の底部で底径6.2cmである。胎土は1mm以下の石英、長石、雲母をわずかに含む。

1号溝出土土器 (図版4・5 第9図、第10図1~9)

第9図の1は蓋、2~8、14は甕、9、10は鉢、11~13、15は壺、16、17は高杯である。1の蓋は口縁から体部にかけて約1/2欠損する。復元口径は33.0cm、器高8.8cmである。体部の内外面とも刷毛目をナデ消している。2~9は甕の口縁部で、2は口縁部を



第9图 1号沟出土弥生土器实测图 (1/4)

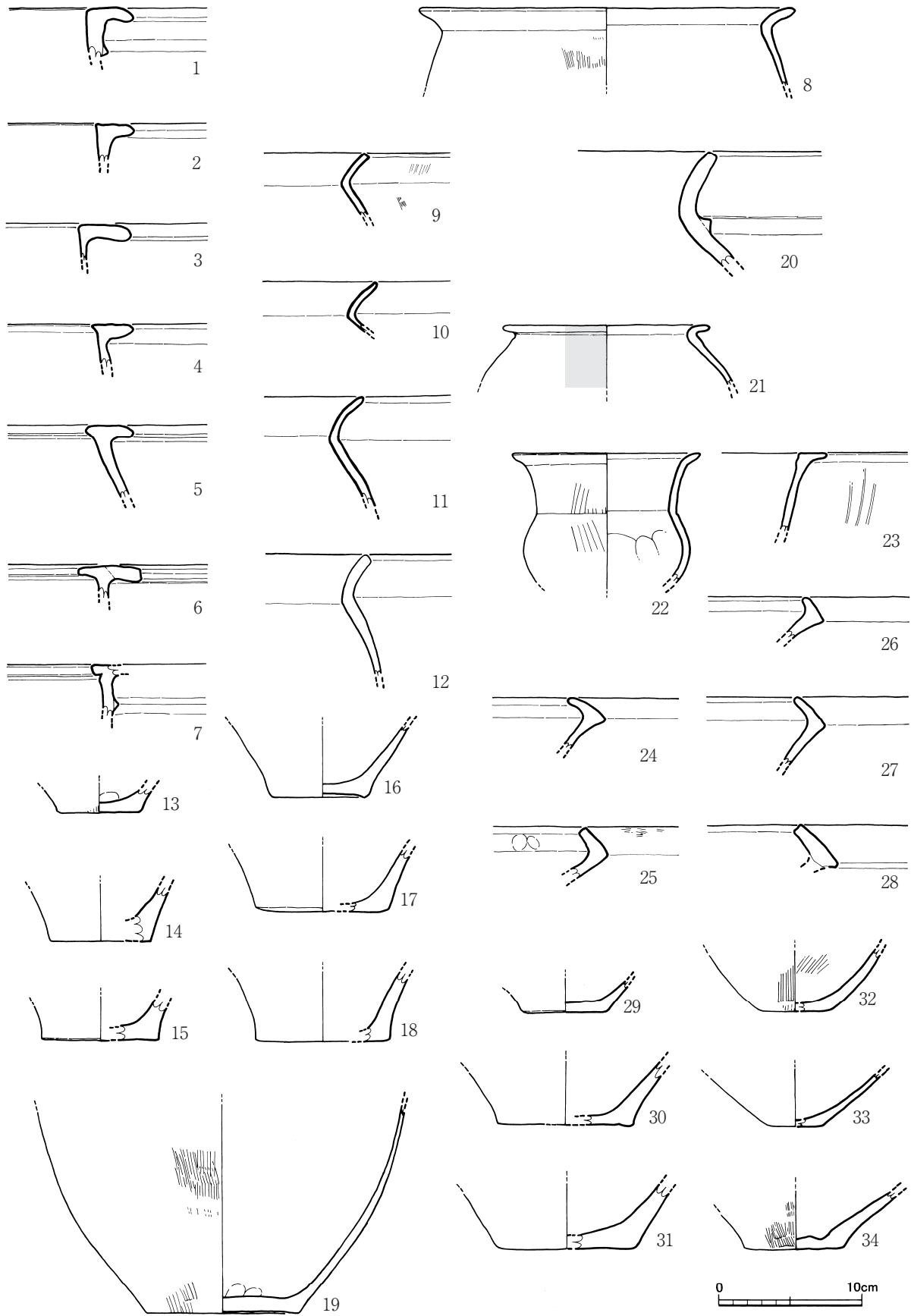


第10图 1·2号溝出土弥生土器実測図 (1/4)

約1/4残存し、復元口径は27.3cmである。胎土は石英、長石、雲母を多く含む。3は口縁部を約1/6残存する。復元口径は29.3cmである。4は口縁部を約1/4残存する。復元口径は26.6cmである。胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。口縁部下に浅い沈線がある。5は口縁部を約1/4残存する。復元口径は36.0cmである。胴部外面に煤が付着する。6は口縁部を約1/6残存する。復元口径は34.4cmである。器壁の磨滅が著しく調整不明。7は丹塗土器で、口縁部を約1/8残存する。口縁端部は中央がやや窪み、幅が細い刻目を施す。口縁部下にはM字突帯がある。胎土は1mm未満の長石、石英と赤色細粒をわずかに含み精製である。8は口縁部を約1/6残存する。復元口径は29.8cmである。9は小型の鉢で外面に突帯が付く。胎土は砂粒をほとんど含まない。10は鉢である。ほぼ完形で、口径16.4cm、器高8.9cm、底径6.2cmを計る。2mm以下の石英、長石、雲母を非常に多く含む。調整は外面の胴部下半はタテハケ後ナデ、上半は刷毛目後ヨコナデ、内面は不定方向のナデで指圧痕がある。11は小型の壺で口頸部を約1/2欠損する。復元口径は12.0cm、器高10.8cm、底径5.0cm、胴部最大径12.0cmである。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を非常に多く含む。肩部に焼成時のものと思われる剥離痕がある。12、13は複合口縁壺の口縁部細片である。12は外面にハケ目、口縁端部から内面にかけてヨコナデを施している。13の胎土は3mm以下の石英、長石を非常に多く含む。14は甕の口縁部細片である。口縁が直立ぎみに立ち上がるが、屈曲はやや不明瞭である。外面の調整はタテハケで、胎土は3mm以下の石英、長石、雲母を非常に多く含む。15は瓢形土器の頸部細片である。内面にはわずかに指圧痕が残る。16は口縁部の細片で磨滅が著しい。鋤先状に突出した口縁内面にわずかに丹塗り痕がみられる。胎土は2mm以下の石英、長石、雲母を含むが色調は浅黄橙色を呈する。17は脚部のみ残存する。胎土は砂粒をほとんど含まない。外面の調整は縦方向のミガキである。脚部外面と杯部内面は丹塗り、脚部内面に丹が数滴垂れた痕がある。第10図の1、3～8は甕、2は壺の底部である。1は丹塗土器で底部のみ残存する。底部はやや上げ底で、底部内面には丹が垂れた痕がある。胎土は砂粒をほとんど含まない。2は底部を約1/5残存し、復元底径は7.8cmである。胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。磨滅が著しく調整不明。3は底部を1/4残存し、復元底径7.8cmである。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。4は底部を約1/4残存する。復元底径8.0cmである。胎土は石英、長石を非常に多く含む。5は底部のみ残存し、底径8.1cmである。6は底部のみ残存する。底径8.6cm、胎土は4mm以下の石英、長石を非常に多く含む。外面に黒斑あり。7は底径8.6cmで、底部から胴部にかけてやや外湾しながら立ち上がる。外面はタテハケ、内面はナデで指圧痕がある。8は底部を約3/4残存する。胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。9は台状の土器で用途は不明である。全体の約1/4が残存する。色調は橙色で、器壁の磨滅が著しく調整不明であるが内面には粘土の接合痕と指圧痕がある。筒状部分に円形の穿孔があり、破片のため不明瞭ではあるが穿孔が2ヶ所にある。

2号溝出土土器 (図版5 第10図10～16)

第10図の10～16は甕である。10は小型の甕で、口径16.3cm、器高12.9cm、底径6.9cmを計る。胎土は4mm以下の石英、長石を非常に多く含む。11は口縁部細片で器壁の磨滅が著しい。12



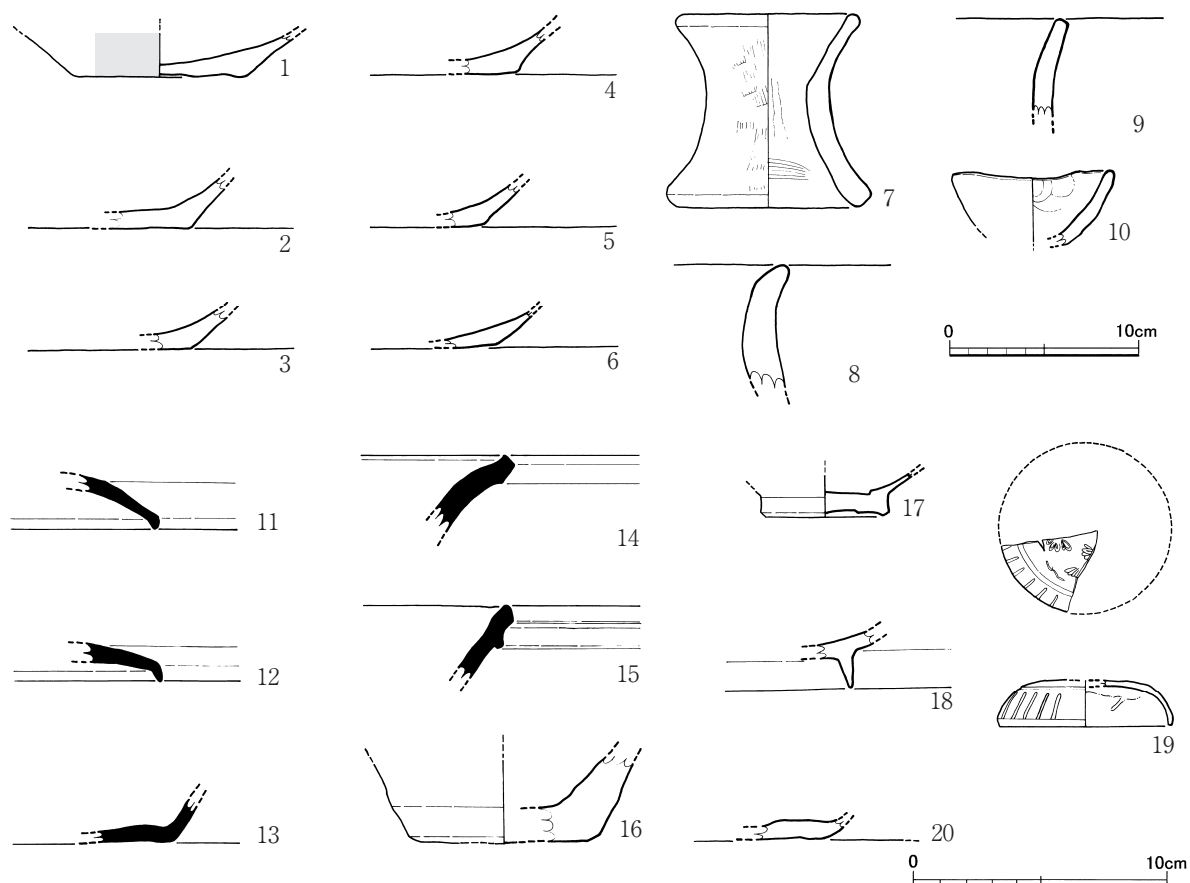
第11图 包含層出土弥生土器实测图 (1/4)

は甕の口縁部細片である。胎土は1～2mm前後の石英、長石を非常に多く含む。口縁部下に突帯が付く。13は口縁部を約1/6残存し復元口径32.0cmである。胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を非常に多く含む。外面の調整はタテハケであるが器壁の磨滅が著しい。14は底部を約1/2残存し、復元底径は7.4cmである。他の土器と比べて底部が厚く、外面の調整はケズリである。15は底部のみ残存し、底径9.2cmを計る。胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデ調整で、外面には丹塗痕あり。16は底部を約4/5残存する。底径9.5cmで、胎土は石英、長石、雲母、赤色細粒を多く含む。

包含層出土土器 (図版5・6 第11、12図)

第11図の1～20、29～31は甕、21、34～36、38～42、45、48は壺である。1～6は逆L字形または鋤先状の口縁部細片で、1は口縁部下に三角形の突帯が付く。いずれも器壁の磨滅が著しく、胎土は石英、長石、雲母を多く含む。8～12はく字形の口縁部細片で、8は口縁部を約1/4残存し、復元口径は26.2cmである。いずれも器壁の磨滅が著しく、胎土は石英、長石、雲母を含む。9は口縁端部が浅く窪む。外面に煤が付着。13～19は底部破片で、いずれも器壁の磨滅が著しく、胎土は石英、長石、雲母を多く含む。16、19はやや上げ底になっている。26～28は複合口縁壺の口縁部細片である。いずれも器壁の磨滅が著しく、胎土は石英、長石、雲母を多く含む。21は無頸壺の口縁部細片で、外面に丹塗痕あり。7は甕の口縁部細片で、口縁部内面は断面長方形の粘土帯が張り付く。22、23は小型の広口壺の口縁部細片である。22は口縁から体部にかけて約1/3残存し、復元口径13.1cm、復元胴部最大径11.6cmを計る。口縁部をやや外反させる。23は頸部外面にわずかに暗文がみられる。22、23とも胎土は砂粒をほとんど含まない。32～34は壺の底部細片である。22はわずかに丸みをおびる。32の胎土は砂粒をほとんど含まない。33は底部内面に指圧痕が残り外面に黒斑あり。

第12図の1～10は弥生土器で、1～6は壺、7～9は器台、10は手捏ね土器である。11～15は須恵器、16は陶器、17～19は陶磁器、20は土師器である。1～6は底部細片で、1は底部を約1/3残存し、復元底径は9.3cmである。外面にわずかに丹塗痕あり。いずれも器壁の磨滅が著しい。27は器台の上半部を約1/2欠損する。復元口径8.8cm、脚部径9.7cm、器高10.2cmである。胎土は4mm以下の石英、長石、雲母を非常に多く含む。外面は細かいタテハケ、内面下半はヨコハケ、端部はヨコナデ調整である。8、9は器台口縁部細片で胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。10は口縁部を約1/2残存し、復元口径8.6cmである。11、12は杯蓋細片で内傾する口縁端部は断面三角形を呈し、天井部外面は回転ヘラケズリである。13は杯身である。14、15は甕の口縁部細片で、14は口縁端部内面をつまみ上げ、端部の断面は平坦である。15は口縁端部外面の断面が三角形でその下に三角形の突帯がある。11～16はいずれも焼成は硬質で暗灰色を呈する。16は壺の底部を約1/4残存する。復元底径は6.6cmである。調整は内外面ともヨコナデで、破片であるため明確ではないが糸切り底か。17は白磁の底部破片で底径4.6cmである。底部内面に沈線があり、高台は内部のケズリが浅い。18は白磁の高台細片である。高台は高く高台内側まで施釉されている。19は青白磁



第12図 包含層出土弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器実測図 (1/4・1/3)

の合子の蓋で、約1/5残存する。復元口径6.9cmである。天井部外面には花文と思われる文様あり。口縁部の釉を削り取る。20は土師皿の細片で、糸切り底で板状圧痕がある。

石器

2号土壌出土石器 (図版6 第13図1)

砥石で幅8.5cm、現存長6.2cm、厚さ2.4cmを計り、4面使用されている。

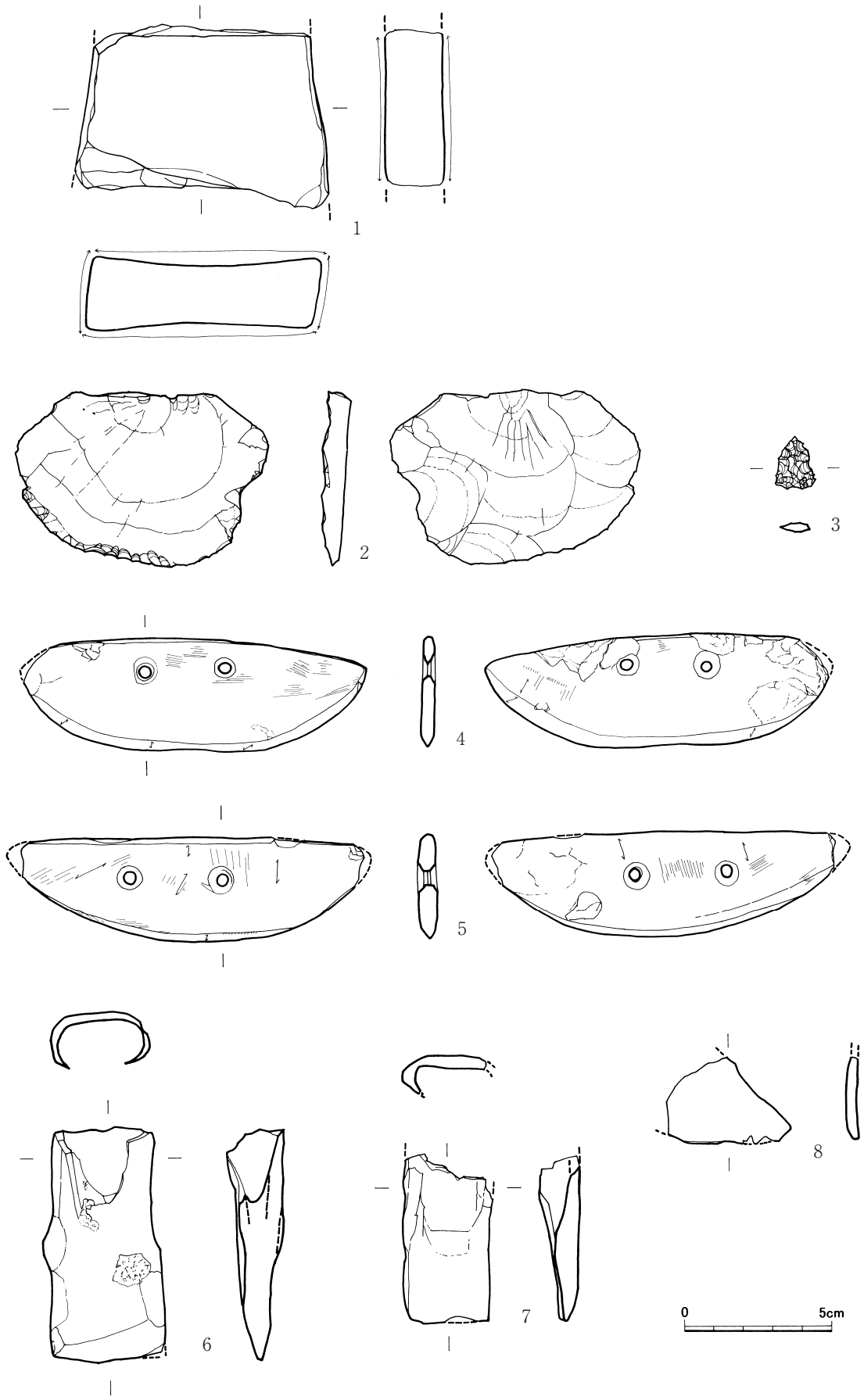
包含層出土石器 (図版6 第13図2～5)

2は削器で、幅広の薄片を片面から加工し刃部を作る。安山岩製か。3は黒曜石製の打製石鏃である。全長1.78cm、幅1.3cm、厚さ0.36cmである。4、5は石庖丁で、4は現存長11.3cm、幅3.8cm、孔間2.7cm、背高0.4cmで、最大厚は孔～刃部間にある。5は両端を欠損し、幅3.5cm、孔間3.1cm、背高0.5cmで、最大厚は穿孔部近くにある。

鉄器

包含層出土鉄器 (第13図6～8)

6、7は鍛造鉄斧で、6は袋状鉄斧である。全長7.9cm、最大幅3.9cmを計る。刃部と袋部の間でやや外側に張り出している。7は柄を装着する部分が1と比べて扁平である。残存長5.7cm、



第13图 2号溝・包含層出土石器・鉄器実測図 (1/2)

最大幅3.0cmである。8は不定形の板状の鉄片で、厚さが0.4cmである。鉄素材か。

(3) 小結

3次調査でも調査地点が1、2次調査と同様に集落の一部であること、また1、2次調査区間の遺構を確認することができた。遺構の密度は高くはなかったが、第2面（下層）では1次調査で検出された2条の溝の続きを確認した。1号溝の時期は弥生時代中期末から後期前半の土器が出土しており、中期末に埋没が始まったと考えられる。2号溝の出土土器も弥生時代中期末頃のもので、1、2号溝とも埋没し始める時期に差がほとんどない。溝の用途については、対象地が後世の開墾により削平されているとはいえ、溝の断面の形状から大南遺跡で検出されたような深さ1 m以上になるような溝になるとは想定できない。従って、防御的な用途をなすとは考えにくい。溝の勾配からみても水利などの用途も考えにくい。区画を意識した溝であると仮定した場合、支丘上の集落である林田遺跡を含めた範囲を囲むものか、大谷遺跡まで延びるのかは今後の調査例の増加を待ちたい。

2 4次調査

4次調査は3次調査の北側にあり、2次調査の北東側にあたる。標高は30m前後を測る。発掘調査は平成10年10月6日から重機による表土剥ぎを開始した。4次調査も3次調査と同様に丘陵斜面の西側に位置するが、2次調査でみられた弥生土器を多量に含む包含層の堆積はみられなかった。検出した遺構は竪穴住居跡7軒、土壇5基、溝4条である。竪穴住居跡の時期は弥生時代中期後半が4軒、古墳時代中～後期が1軒、奈良時代が1軒、不明1軒である。出土遺物はパンコンテナ7箱である。

遺構検出及び記録作成後、埋め戻しを行い11月6日に調査を終了した。

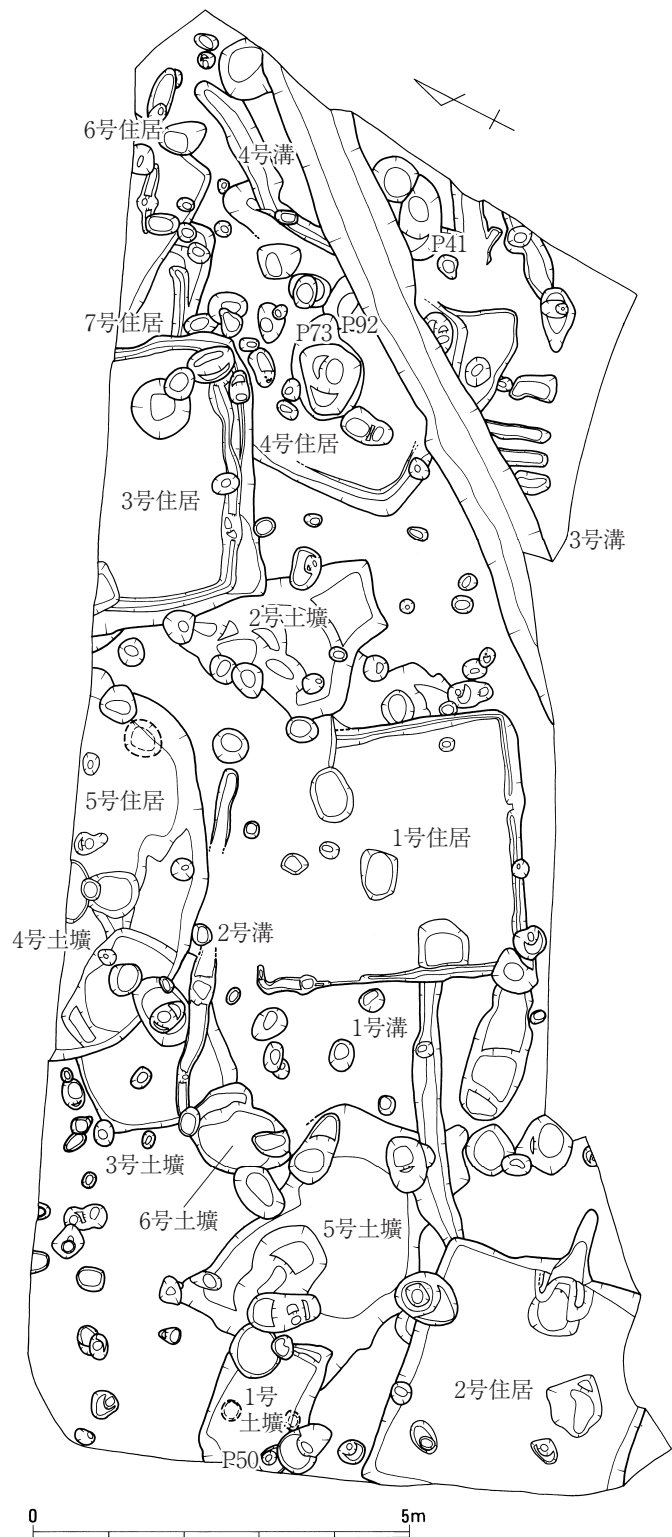
(1) 弥生時代の遺構と出土遺物

弥生時代の遺構には竪穴住居跡、土壇、溝がある。

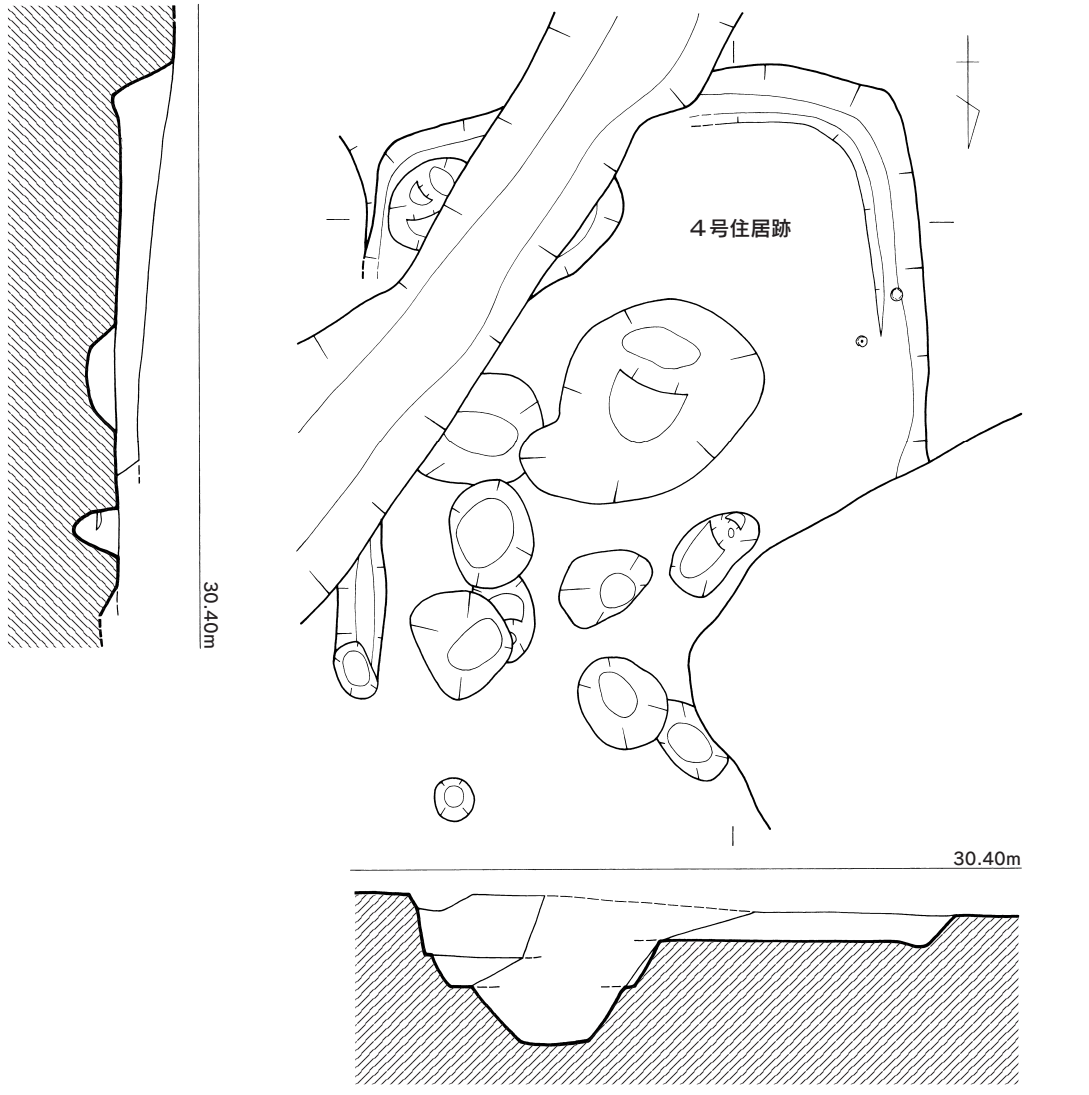
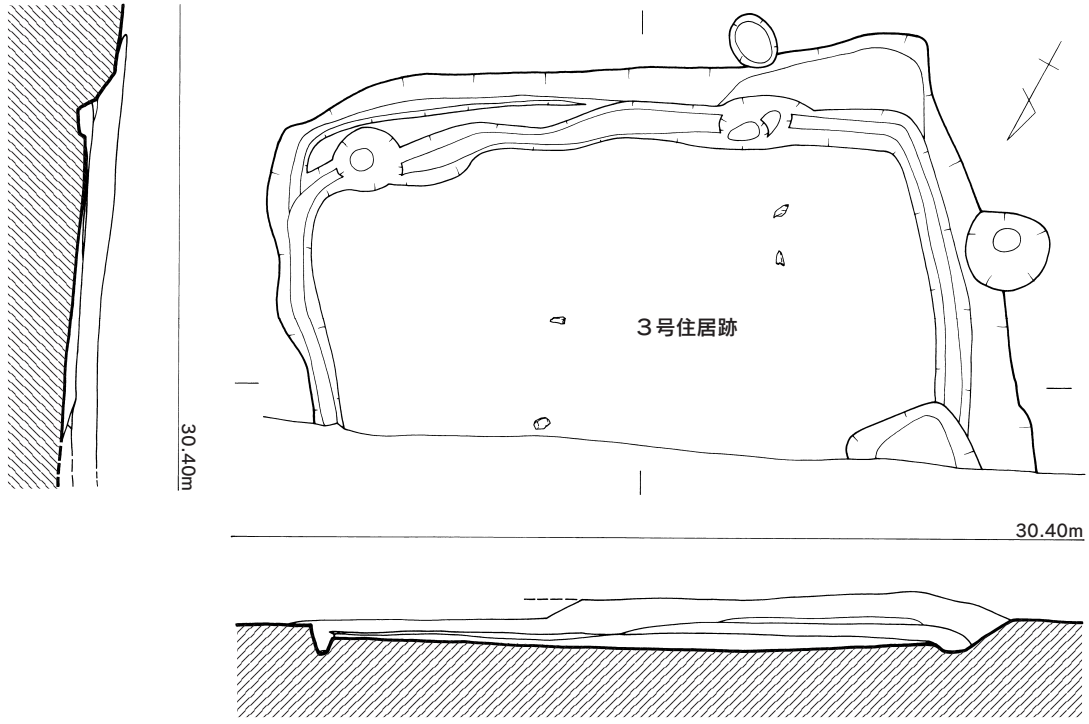
① 竪穴住居跡

3号住居跡 (図版7-2 第15図)

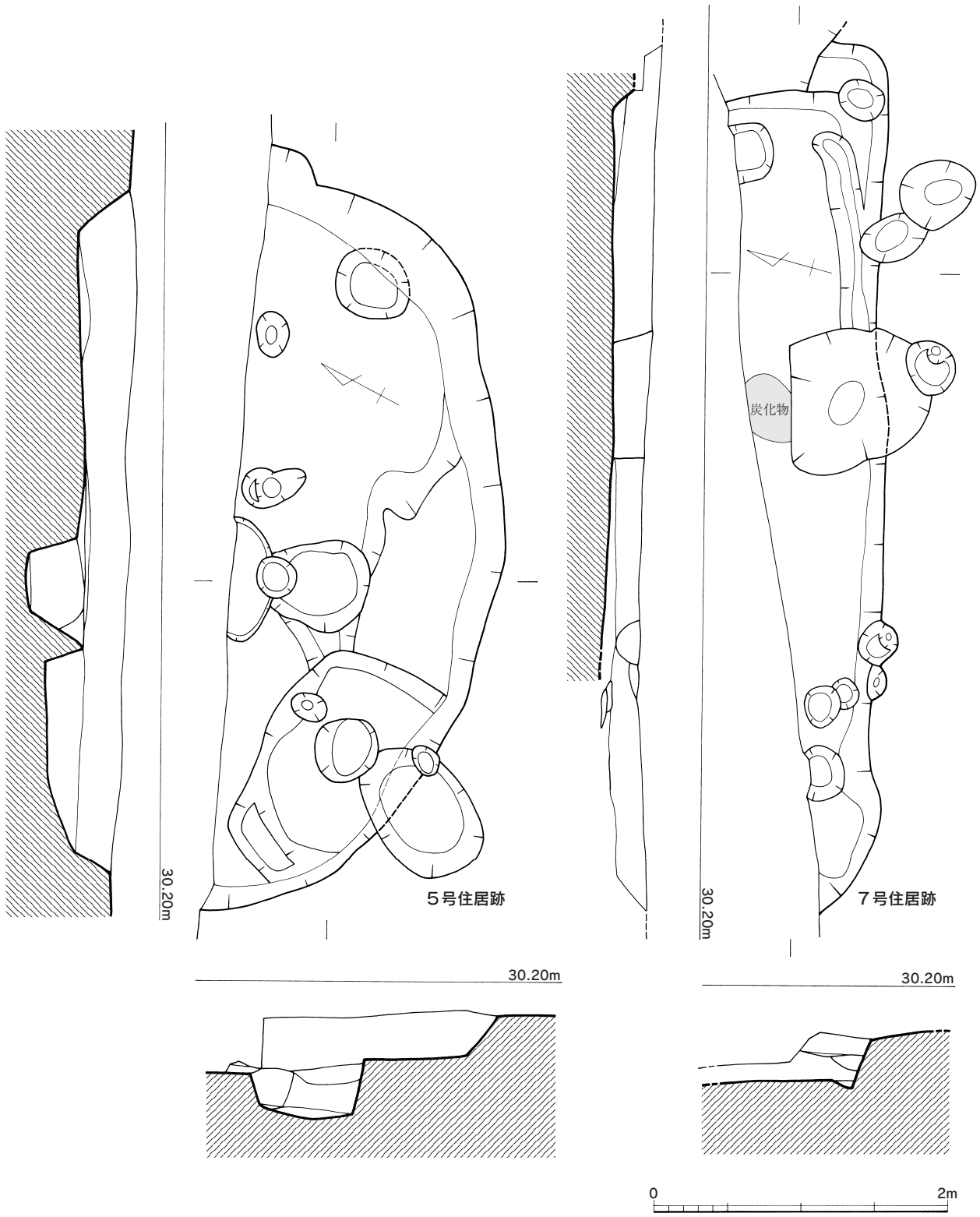
3号住居跡は調査区の北東部にあり、住居の北半分は調査区外である。4、6、7号住居跡を切る。遺構検出面から床面までの深さは約30cmである。方形を呈し南辺は3.3mを測る。周溝がありその幅は約20cmで床面からの深さは5～6cmである。西辺のほぼ中央と思われる位置に屋内土壇がある。床面からの深さ



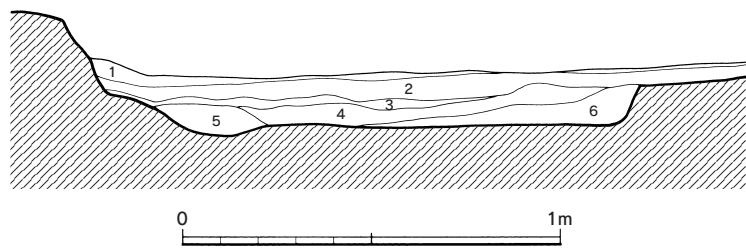
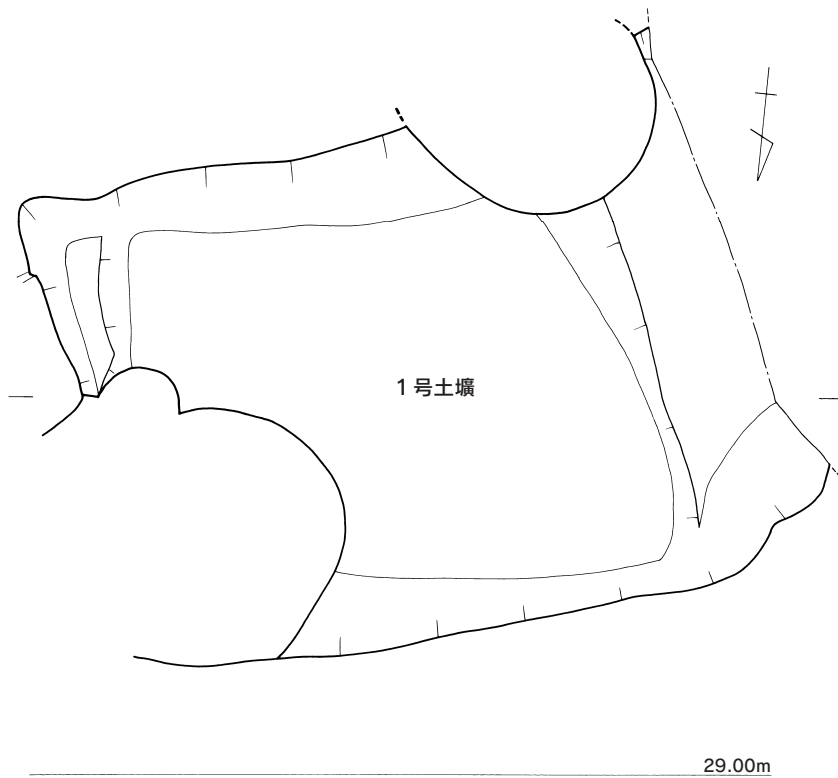
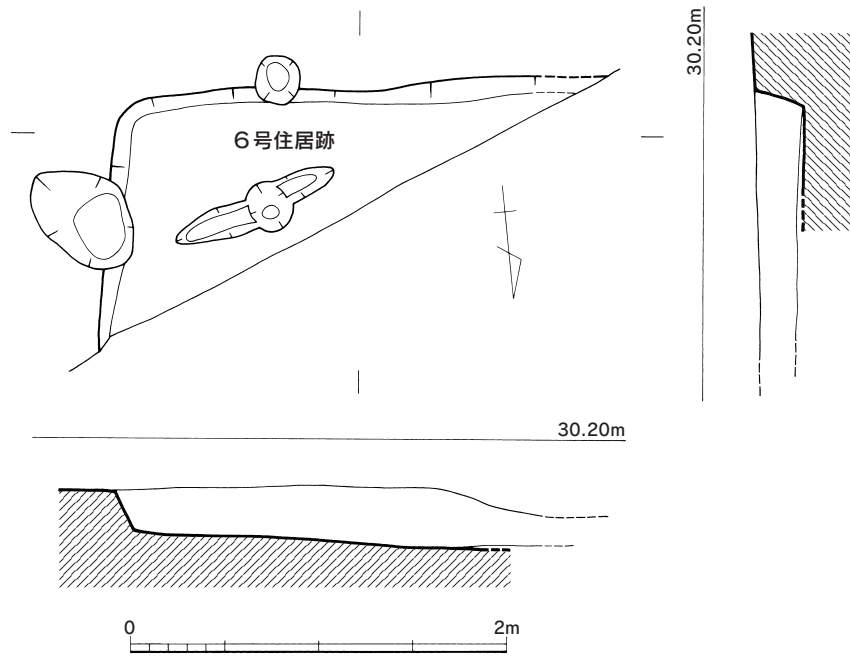
第14図 トバセ遺跡4次調査遺構配置図 (1/100)



0 2m
第15图 3·4号住居跡実測图 (1/40)



第16图 5·7号住居跡实测图 (1/40)



- 1 褐灰色(10YR4/1)土+明黄褐色(10YR6/6)粘質土 炭化物、焼土を多く含む
- 2 橙色(7.5YR6/8)粘質土+にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土
- 3 1とほぼ同じ
- 4 2とほぼ同じ
- 5 淡黄色(2.5Y)シルト質粘土
- 6 5+明褐色(7.5YR5/6)粗砂

第17図 6号住居跡・1号土壇実測図 (1/40・1/20)

は約15cmである。支柱穴及び炉跡は確認できなかった。出土遺物は弥生土器が大半を占めるが細片のみで、ほぼ床面から砥石、石庖丁が出土した。

4号住居跡 (第15図)

4号住居跡は調査区の東部で、3号住居跡、3号溝に切られる。方形を呈し南辺は2.9mを測る。壁際に床面からの深さ約2cmの周溝が巡る。北辺が検出できなかったが、南北方向が長い長方形を呈すると考えられる。出土遺物は弥生土器、土製紡錘車、手捏ね土器などがある。

5号住居跡 (第16図)

5号住居跡は調査区の中央部にあり、住居跡の大半は調査区外にあるため全容はわからないが、方形に近い円形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは30cm残存する。3、4号土壌を切る。住居内の西側で一部埋土に炭化物が含まれていたが、炉跡は確認できなかった。出土遺物は土製品、弥生土器があるが土器は細片のため図化していない。

6号住居跡 (第17図)

6号住居跡は調査区の北東部で方形を呈する。3号住居跡に切られ、7号住居跡を切る。遺構検出面から床面までの深さは約20cmで周溝はない。出土遺物は弥生土器の細片のみである。

7号住居跡 (第16図)

7号住居跡は調査区の北東部で、3・6号住居跡に切られる。方形の住居跡で、南辺がわずかに調査区内にかかり一部幅約20cmの周溝があるが、その大半は調査区外のため、大きさは不明。遺構検出面から床面までの深さは約30～40cmである。弥生時代中期後半の壺を伴うピットに切られている。出土遺物は弥生土器である。

② 土壌

1号土壌 (第17図)

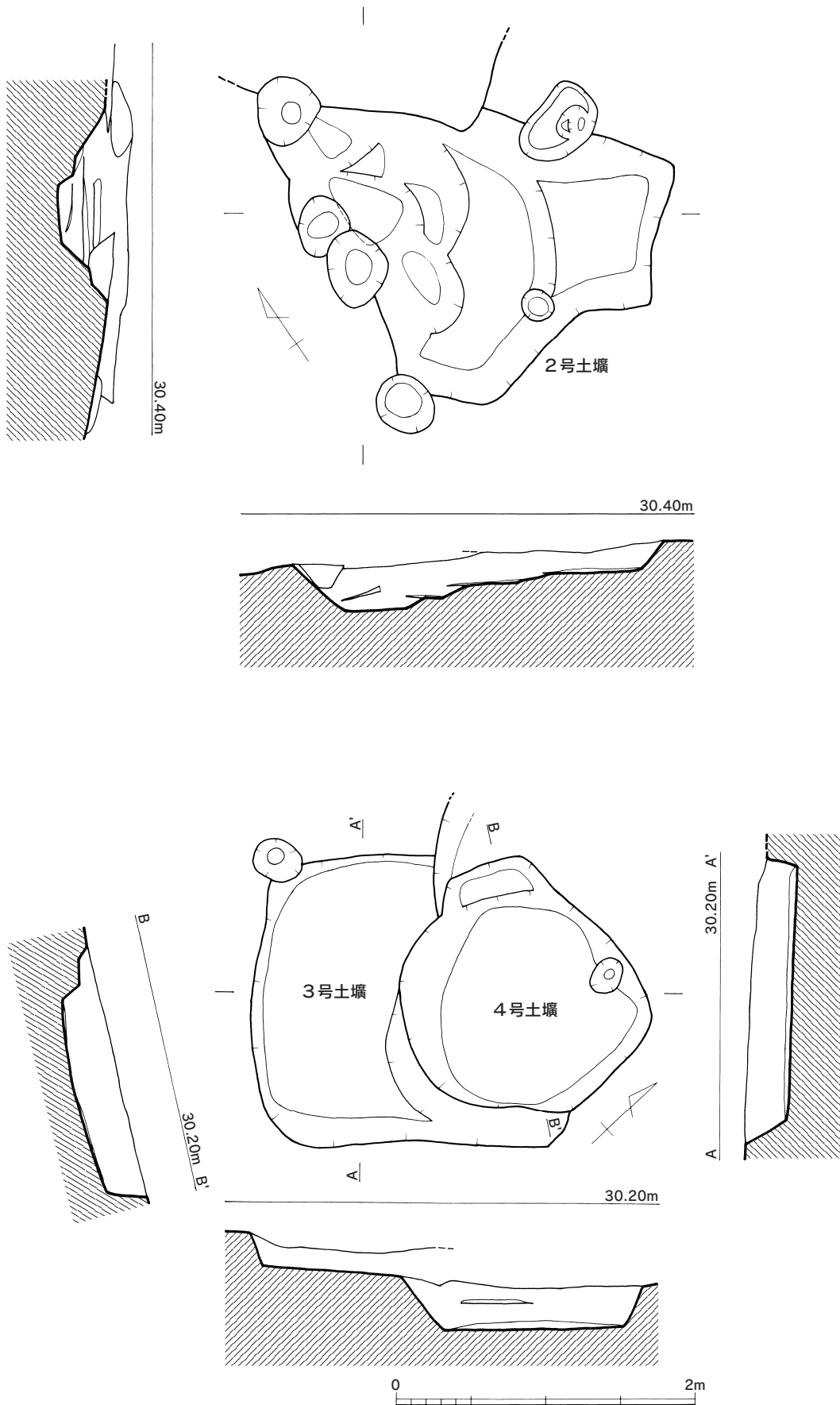
1号土壌は調査区の西部にあり5号土壌を切る。平面プランは方形で、長軸3.4m、短軸1.3m、深さ0.25mを測る。床面には東西方向に2ヶ所ピットがあるが、1号土壌に付随するものではなく1号土壌に切られるものかと思われる。遺構検出面から15cmの深さ炭化物、焼土を多く含む層があり、この炭化物を含む層は1～2cm堆積していた。出土遺物は弥生土器細片で時期の特定は難しい。

2号土壌 (第18図)

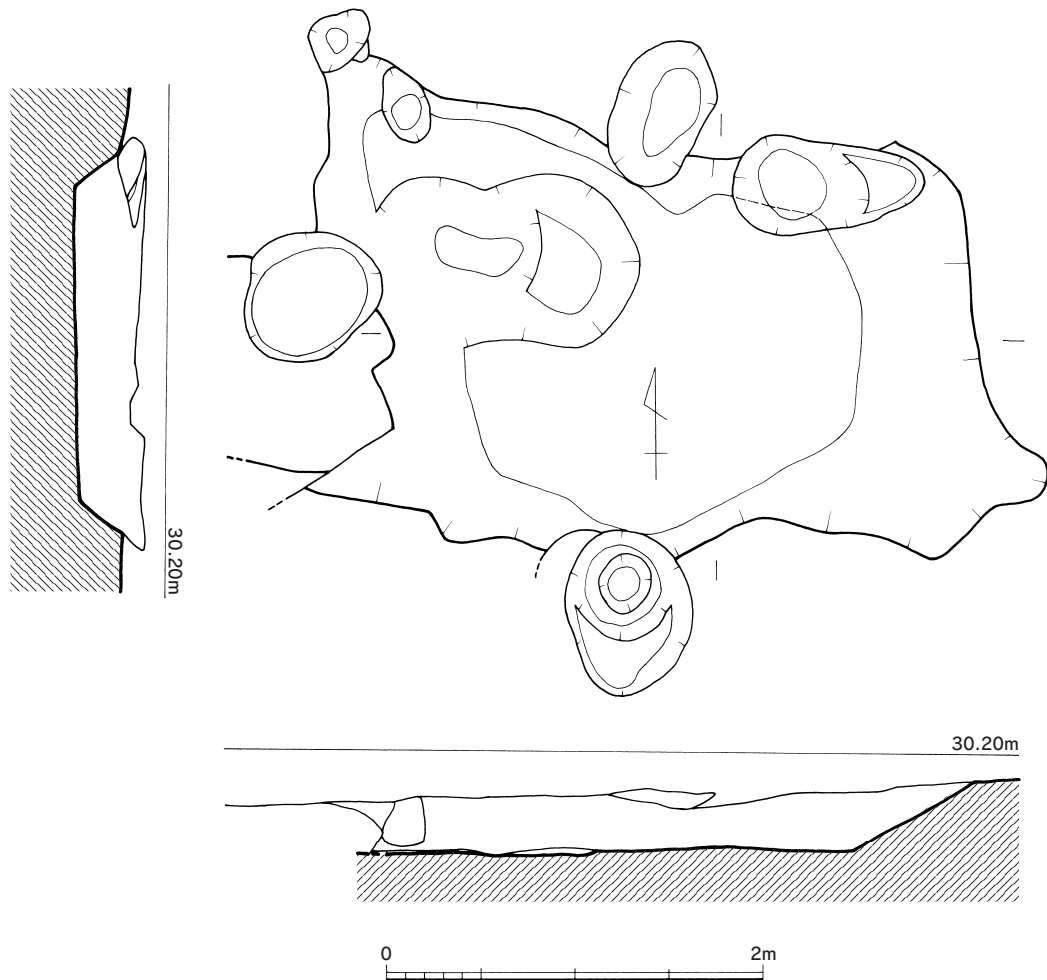
2号土壌は調査区中央にあり、3号住居跡に切られる。不定形でいくつかのピットが切り合った状態であるが、明確な切り合いを確認できなかったので、土壌として遺物を取り上げた。出土遺物はすべて弥生時代中期の土器細片である。

3号土壌 (図版7-3 第18図)

3号土壌は調査区西北部にあり、5号住居跡、4号土壌、2号溝に切られる。平面プランは方形で、短辺2.0mを測る。遺構検出面から床面までの深さは約10～20cmである。出土遺物はすべて弥生時代中期の土器細片である。



第18图 2·3·4号土壙实测图 (1/40)



第19図 5号土壙実測図 (1/40)

4号土壙 (図版7-3 第18図)

4号土壙は5号住居跡に切られ、3号土壙を切る。平面プランは隅丸方形で、長軸3.8m、短軸3.2m、深さ約50cmを測る。出土遺物は弥生中期の土器細片のみである。

5号土壙 (図版10-2 第19図)

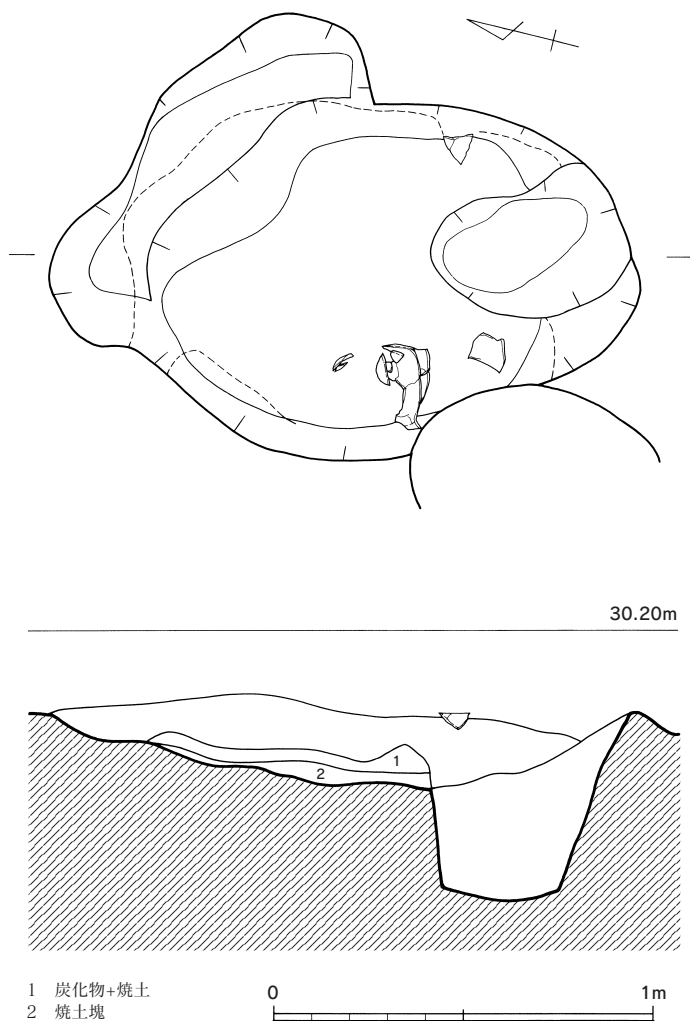
5号土壙は調査区の西部にあり1号土壙に切られる。平面プランは不定形で、長軸3.5m、短軸2.2m、深さ約30cmを測る。出土遺物は弥生時代中期の土器細片がある。土器の他に、厚さ2.1cmの土器のような細片があるが、土器としては器壁が厚いことから炉壁の一部であろうか。

6号土壙 (図版10-1 第20図)

6号土壙は調査区の西部にあり3号土壙を切るが、南側はピットに切られる。平面プランは長軸1.3m、短軸0.95m、深さ約20cmの楕円形で、北東側に長軸1.8m、短軸0.25mの段がある。段差は明瞭ではないが、ほぼこの段の深さまで炭化物と焼土があり、この層の下には焼土塊が堆積していた。出土遺物は弥生時代中期の土器細片である。

③ 溝

1号溝



第20図 6号土坑実測図 (1/20)

1号溝は調査区の西部で、1、2号住居跡に切られる。幅30cm、深さ約5cmで、東から西へ低く傾斜している。出土遺物は弥生土器細片であるが、時期は不明である。

2号溝

2号溝は1号溝の北側に平行している。3号土坑を切る。幅約25cm、深さ1~2cmで、1号溝と同様に西へ低く傾斜している。出土遺物はない。

4号溝

4号溝は調査区の東部で4号住居跡に切られる。幅40cm、深さ約10cmである。3号溝と平行であるが、1・2号溝の延長線上に位置する。出土遺物は弥生土器細片である。

④ 出土遺物

土器

3号住居跡出土土器 (第21図1)

1は壺の底部で約1/4残存し復元底径6.8cmである。底部外面はやや上げ底ぎみで丁寧なナデ調整である。

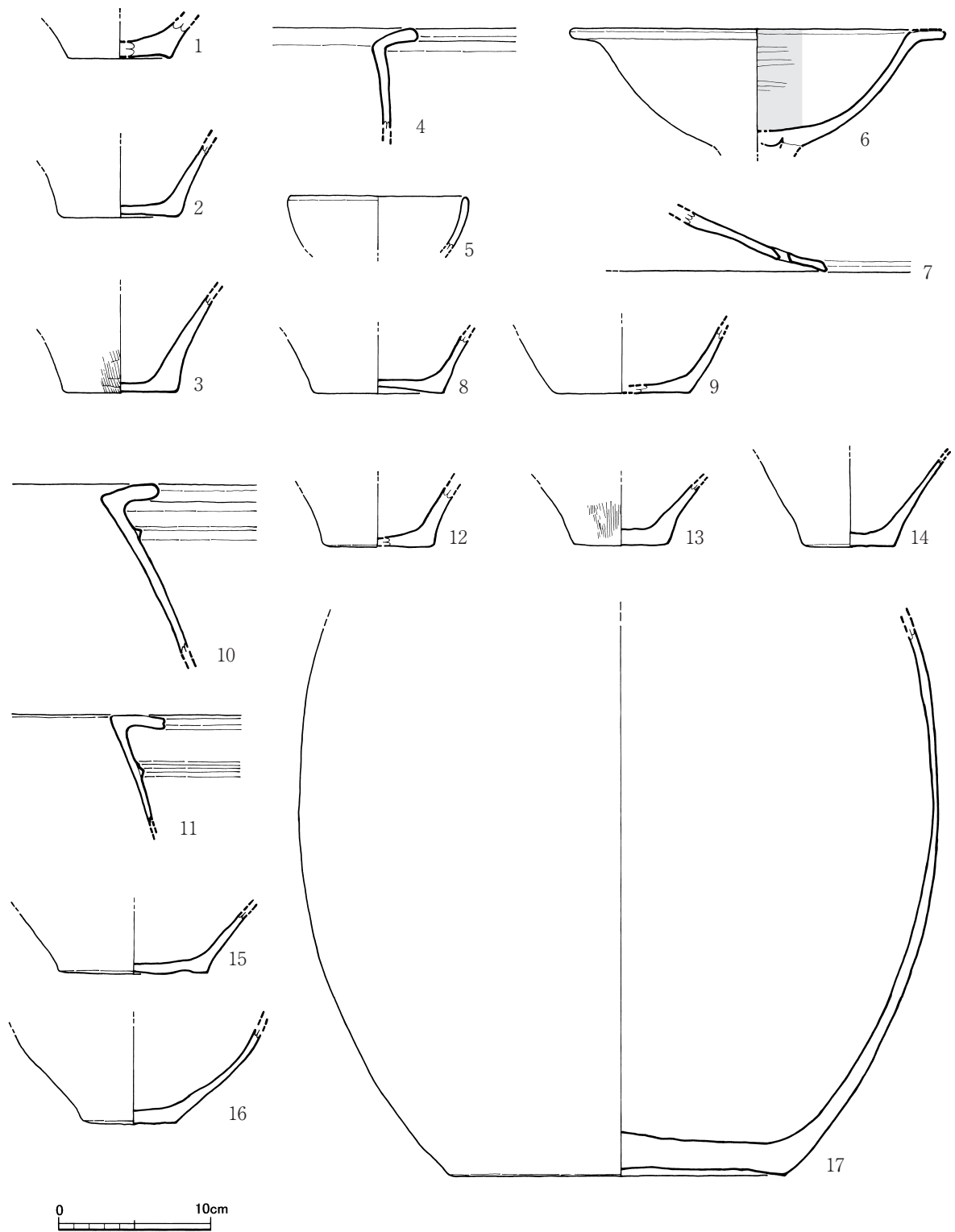
3号住居跡出土の弥生土器は細片のみで図化していないが、その他の器種には甕、器台、高杯がある。

4号住居跡出土土器 (第21図2~9)

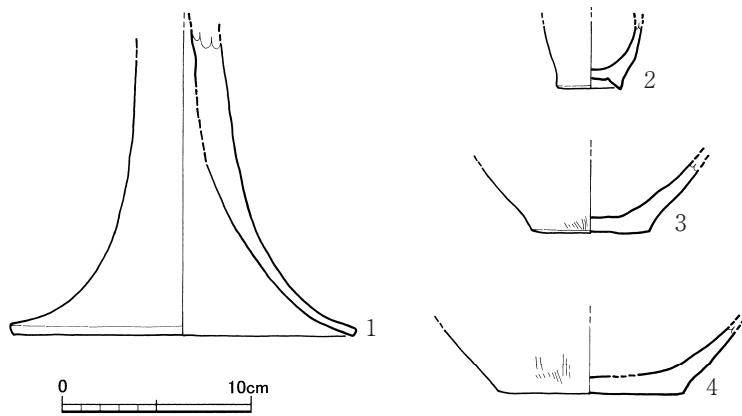
2~4、8、9は甕で、2、3は底部のみ残存し底径7.6cmを計り、胎土は3mm以下の石英、長石、雲母を非常に多く含む。2はにぶい黄橙色、3は明赤褐色を呈する。4は口縁部の細片で、外面の調整はタテハケであるが内面の磨滅が著しい。胎土は3mm以下の石英、長石、雲母を非常に多く含む。8は底部を約1/4残存し、復元底径8.5cmである。器壁の磨滅が著しく調整不明。9は底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。底部を約1/4残存し復元底径8.8cmである。5は鉢で口縁部を約1/4残存する。復元口径11.4cmである。6は高杯で杯部を約1/4残存する。復元口径は24.7cmで内面の調整は横方向のミガキで丹塗りである。外面は磨滅のため調整不明。胎土は砂粒をほとんど含まない。7は蓋の破片で口縁端部がやや窪む。焼成前の穿孔がある。胎土は砂粒をほとんど含まない。

7号住居跡出土土器 (図版11 第21図10~17)

10~15、18は甕、16は壺である。10、11は口縁部の破片で、口縁部外面下に断面三角形の突



第21图 3·4·7号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)



第22図 ピット出土弥生土器実測図（1/4）

帯がある。胎土は石英、長石、雲母、赤色細粒を含む。11は口縁端部が凹状に窪み、口縁部下にM字状の突帯がある。器壁の磨滅が著しいが丹塗痕がある。胎土は2mm以下の石英、長石、雲母を多く含む。12～15は底部で、12は約1/2残存し復元底径7.3cmを計る。13は底径6.2cmで外面に黒斑あり。14は底径6.1cmで器壁の磨滅が著しく調整不明。12～14の胎土は3mm以下の石英、長石、雲母を多く含む。15は底径9.8cmで、胎土は4mm以下の石英、長石、雲母を多く含む。色調は明黄褐色を呈する。16は底部で胴部の湾曲から小型の壺か。底径6.1cmで胎土は1mm未満の石英、長石、雲母をわずかに含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。17は口縁から胴部上半にかけて欠損する。底径は16.5cmと大きく、上げ底になっている。胴部と底部に近い下半の2ヶ所に黒斑がある。復元胴部最大径は32.0cmである。器壁の磨滅が著しく調整不明。

ピット出土土器（図版11 第22図）

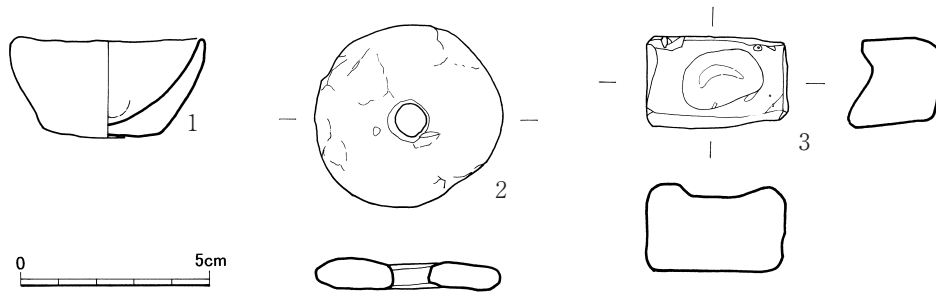
ピット出土の弥生土器で図化できたものはわずかであった。1はP92出土の高杯で脚部のみ残存する。2mm以下の石英、長石、雲母をわずかに含む。脚裾部径18.3cmである。2はP41出土の手握ね土器である。底部のみ残存し底径3.4cmで平底に輪状の粘土紐を貼付け高台のようにしている。胎土は砂粒をほとんど含まない。3はP50出土で、底部を約3/4残存し底径6.2cmである。外面に黒斑あり。4はP73出土で底部を約1/3残存し、復元底径9.8cmを計る。胎土は石英、長石、雲母を非常に多く含む。

土製品（図版11 第23図）

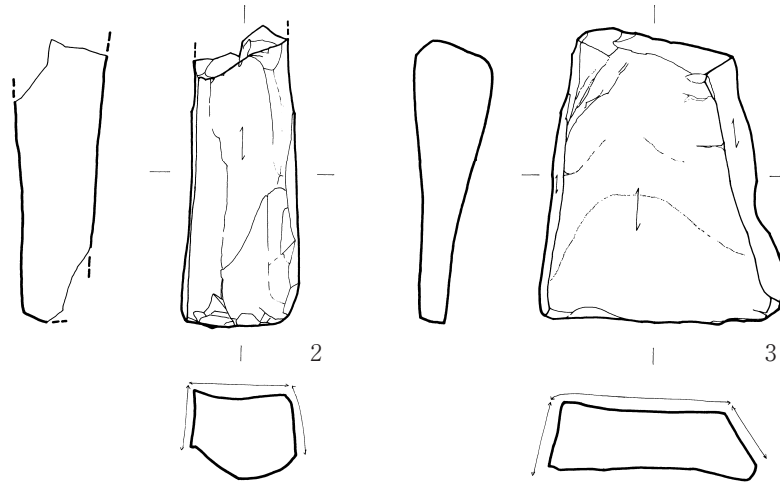
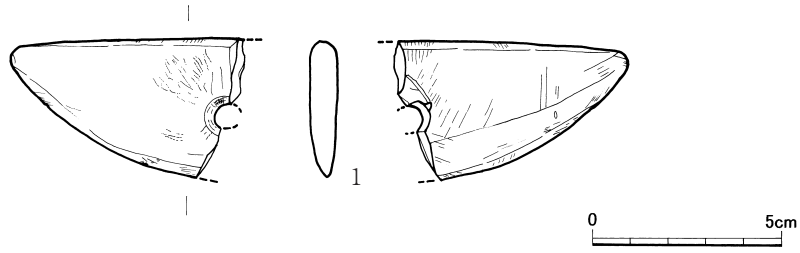
1、2は4号住居跡出土である。1は手握ね土器で口径4.9cm、器高2.6cmを計る。器壁の磨滅が著しい。2は紡錘車で直径5.0cm、厚さ0.8cmを計る。中央の孔以外は磨滅が著しい。3は5号住居跡出土で床面から出土した。長さ3.7cm、幅2.4cm、厚さ2.3cmの立方体で一面に指で押したような窪みがある。胎土は1～2mmの石英、長石、雲母をわずかに含む。用途不明である。

石器（図版12 第24図、第26図1、2）

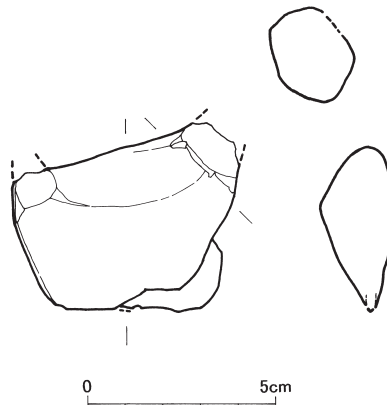
第24図の1～3は住居跡出土である。1、2は3号住居跡出土である。1は石庖丁の破片で背高0.8cm、最大厚は孔～背部にある。2の砥石は幅2.8cm、残存長7.8cm、厚さ2.1cmを計る。3面使用されているが、一側面はあまり研ぎ減っていない。3は4号住居跡出土の砥石で幅約6.6cm、残存長7.7cmで、厚さは2.1cm、最も研ぎ減った部分の厚さは0.8cmである。第26図の1、2は包含層出土で、1の砥石は厚さ約2.1cm、最大幅7.0cm、残存長9.2cmを計る。2面が使用され



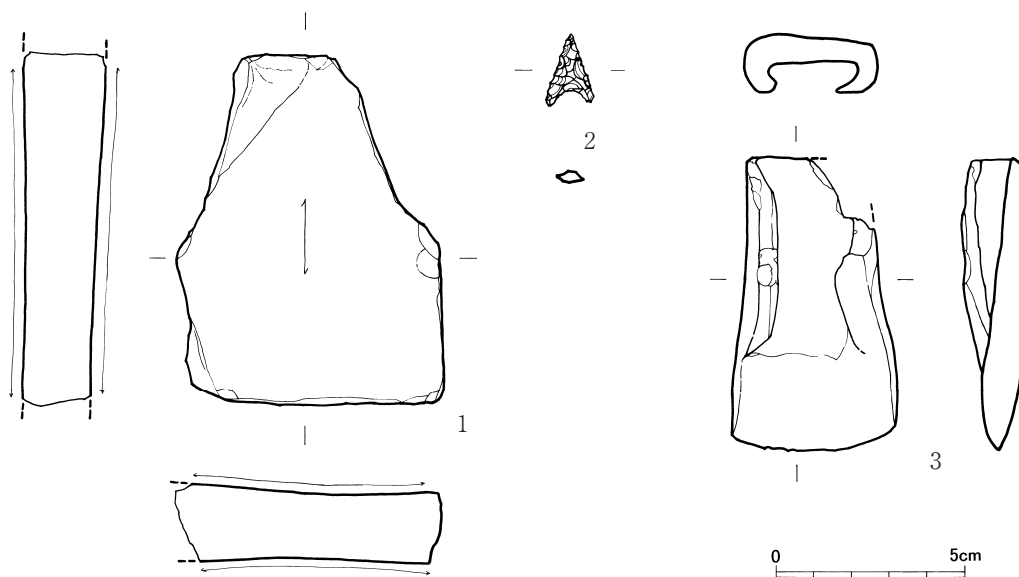
第23图 4・5号住居跡出土土製品実測図 (1/2)



第24图 3・4号住居跡出土石器実測図 (1/2)



第25图 3号住居跡出土鉄器未製品実測図 (1/2)



第26図 包含層出土石器・鉄器実測図（1/2）

て、側面には砥石として使用した痕跡がない。花崗岩製か。2は黒曜石製の石鏃で全長2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。

鉄器（図版12 第25図、第26図3）

第25図は台形に近い形で、長辺側が緩やかに湾曲する。湾曲した先端は折れて欠損しているが、折れた部分の断面は四角形に近い楕円形である。短辺側は錆ぶくれで割れているが鉄斧の刃部のように断面が三角形である。未製品と思われるが器種はわからない。

第26図の3は鉄斧で試掘調査時に出土した。試掘調査では地山である黄褐色粘質土の上の堆積層である暗褐色砂土から出土している。鉄斧が出土した層や位置から想定すると、1号住居跡の埋土中からの出土である可能性がある。しかし、1号住居跡も後世の削平によりかなり削られ残存状態もよくないことから1号住居跡出土と断定できないため包含層出土遺物として扱う。鉄斧の全長は7.7cm、最大幅は刃部にあり4.4cmを計る。袋状鉄斧であるが袋部の折り返しは短く、断面は長方形を呈する。

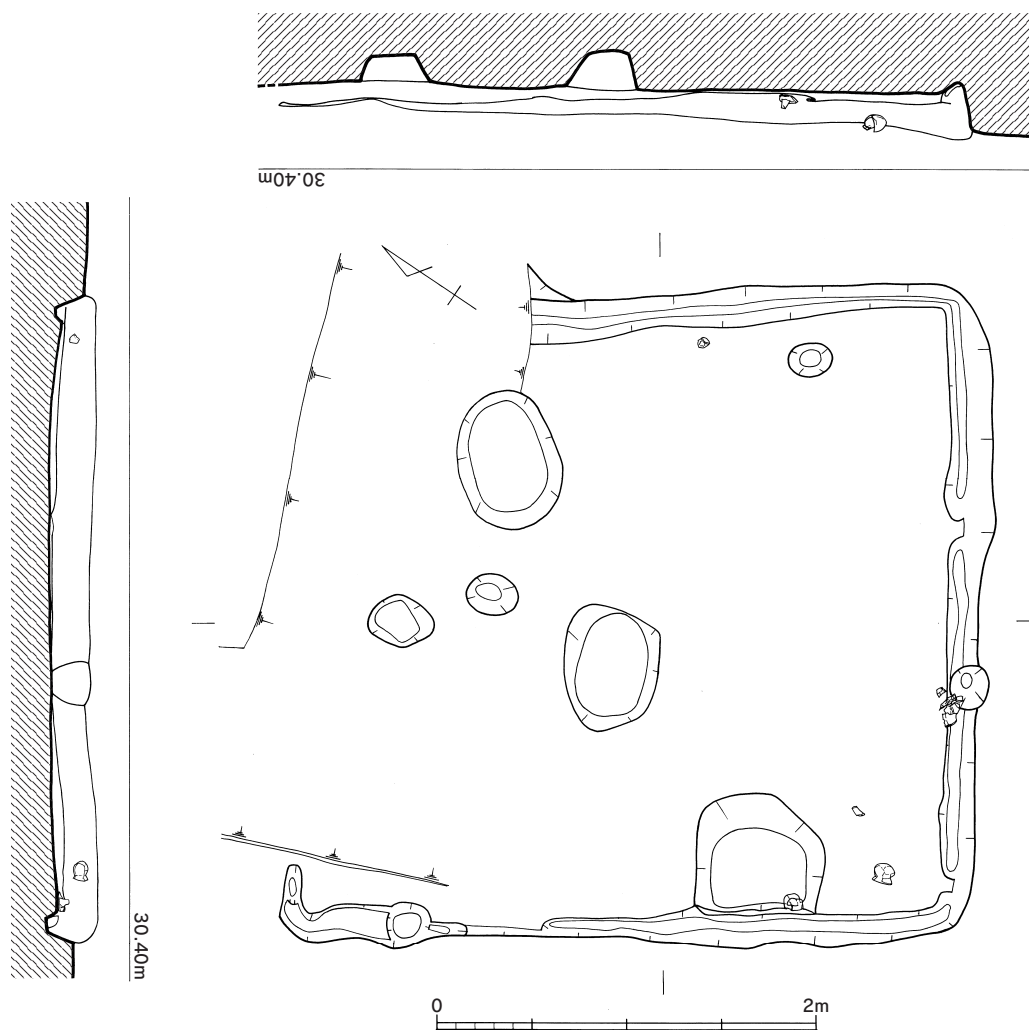
(2) 古墳時代の遺構と出土遺物

古墳時代の遺構には竪穴住居跡1棟がある。

① 竪穴住居跡

1号住居跡（図版7-1 第27図）

1号住居は調査区のはほぼ中央にあり、長辺3.7m、短辺3.5mのはほぼ正方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは約10cmで、住居の北側は試掘時のトレンチ調査で削られている。周溝があり、幅20cm、床面からの深さ約10cmである。西辺には屋内土壌があり、幅約68cm、床面からの深



第27図 1号住居跡実測図 (1/40)

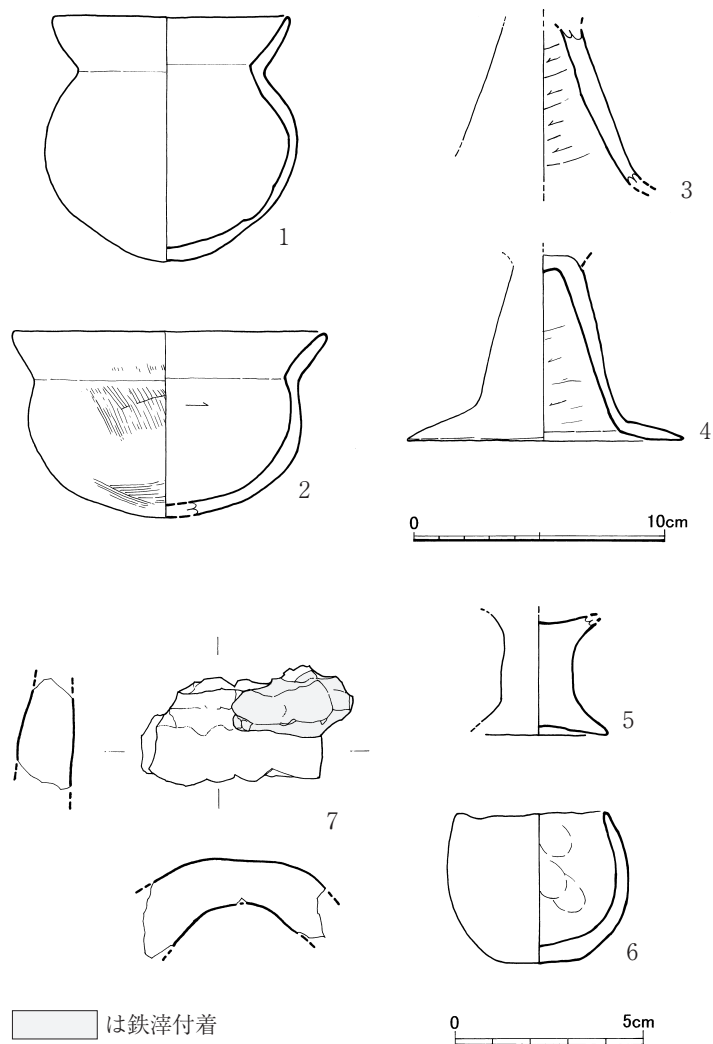
さは約10cmを測る。主柱穴、炉跡は検出できなかった。

出土遺物には土師器、鞆の羽口などが出土している。

② 出土遺物 (図版12 第28図1～6)

土器・土製品

1～4は土師器で、1は小型丸底壺で口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。口径9.3cm、器高9.8cm、胴部最大径10.1cmを計る。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。住居跡南西隅の床面より出土した。2は小型の鉢で、復元口径12.4cm、器高7.4cmである。胴部内面の調整はヨコ方向のケズリ、外面はハケ目を施す。3、4は高杯の脚部である。4の胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を含む。外面の調整は磨滅が著しく調整不明であるが、内面はヨコ方向の削りである。3は住居跡西辺にある屋内土壌の上層から出土した。脚部のみで裾部は欠損するが4と同様に裾部がほぼ直角に開くといえる。5土製品の支脚で端部を欠損する。胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を少し含む。



第28図 1号住居跡出土土師器・土製品・鞆羽口実測図（1/3・1/2）

6は手捏ね土器。平底に近い丸底で、胴部から口縁にかけて内湾しながら立ち上がる。口径3.9cm、器高4.0cmである。

鉄器生産関連遺物（図版12 第28図7）

7は鞆羽口である。羽口先端の破片で先端に鉄滓が付着している。胎土は1～3mm前後の石英、長石、雲母を多く含む。羽口の外面は灰黄褐色で強く焼けしまっており、被熱によるものと思われる。

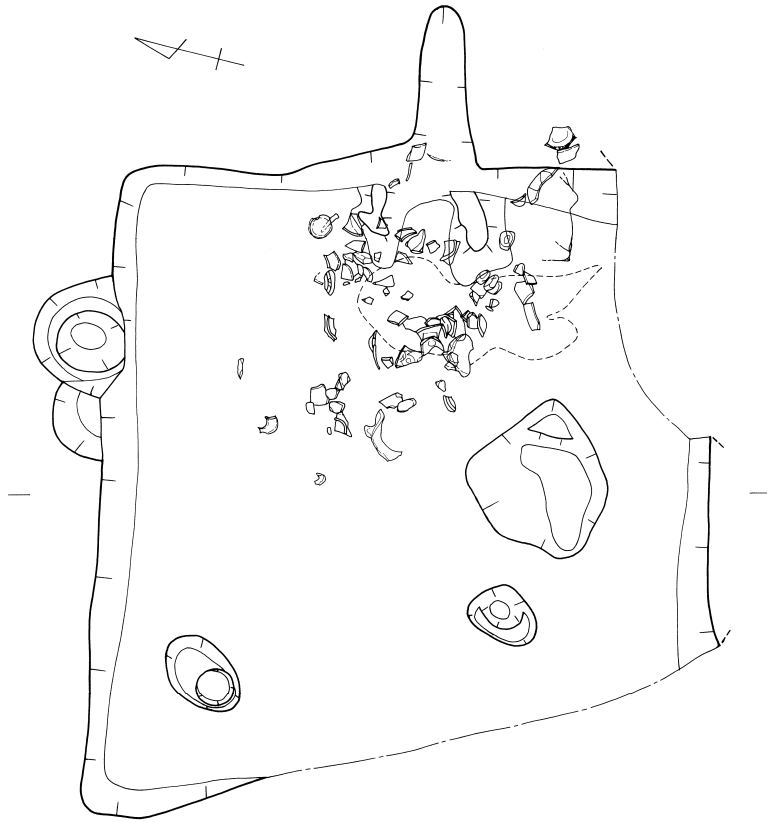
(3) 歴史時代の遺構と出土遺物

歴史時代の遺構には、竪穴住居跡、溝がある。

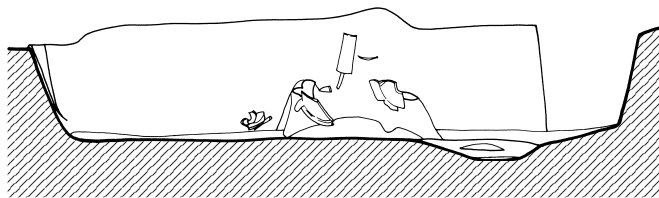
① 竪穴住居跡

2号住居跡（図版8・9 第29、30図）

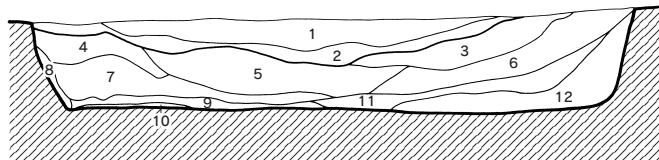
2号住居跡は調査区の南西隅にあり、長辺3.5m、短辺3.2mで平面プランはほぼ正方形である。遺



30.40m



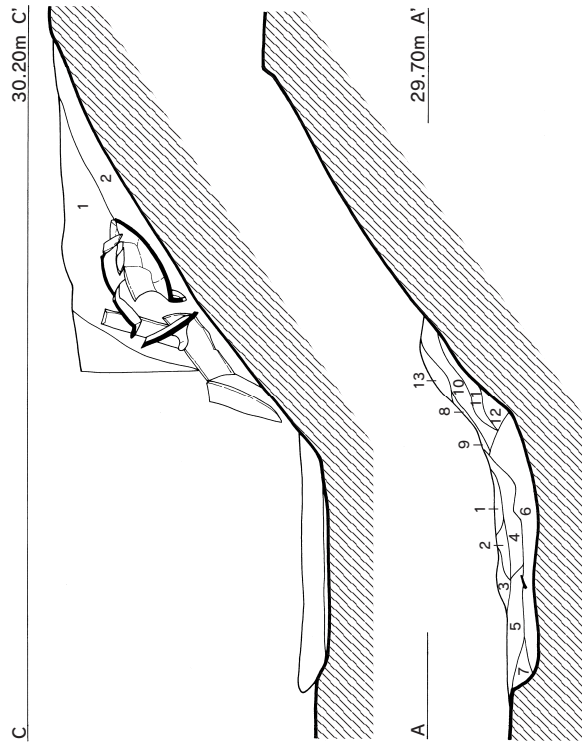
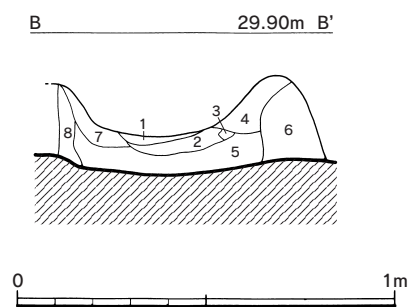
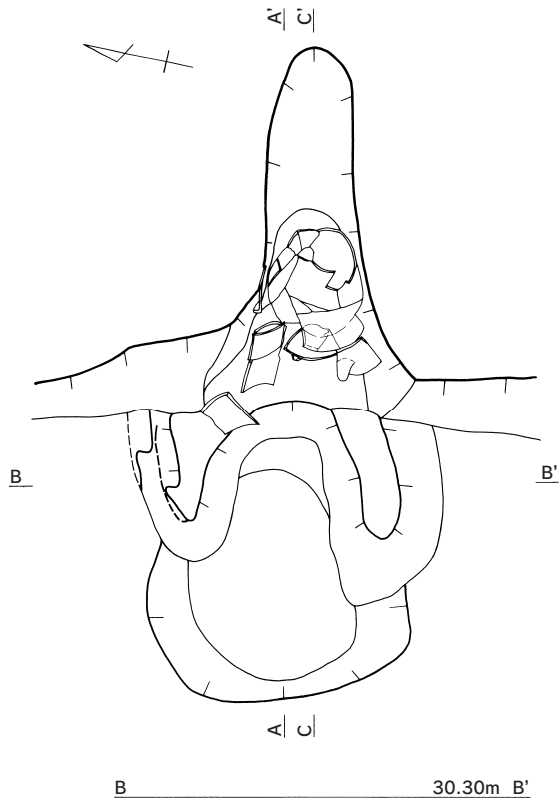
30.40m



0 2m

- 1 黒褐色(10YR3/1)土 土器・炭化物を含む
- 2 黒褐色(10YR3/2)土 土器・炭化物を含む
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)+にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土+にぶい黄色(2.5Y6/2)シルト質土 炭化物をごく少量含む
- 4 黒褐色(10YR3/2)土+黄褐色(10YR5/8)粘質土+にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質土
- 5 にぶい黄褐色(10YR4/3)土+黄褐色(10YR5/8)粘質土+にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質土
- 6 黄褐色(10YR5/6)シルト質土
- 7 褐色(10YR4/4)土+にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質土+にぶい黄色(2.5Y6/2)粘質土
- 8 黒褐色(10YR3/2)土
- 9 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質土+黄褐色(2.5Y5/3)シルト質土+黄褐色(10YR5/6)粘質土
- 10 黄褐色(10YR5/6)粘質土+浅黄色(2.5Y7/4)シルト質土
- 11 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質土+黄褐色(10YR5/6)粘質土
- 12 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質土 (11よりやや暗い)

第29図 2号住居跡実測図 (1/40)

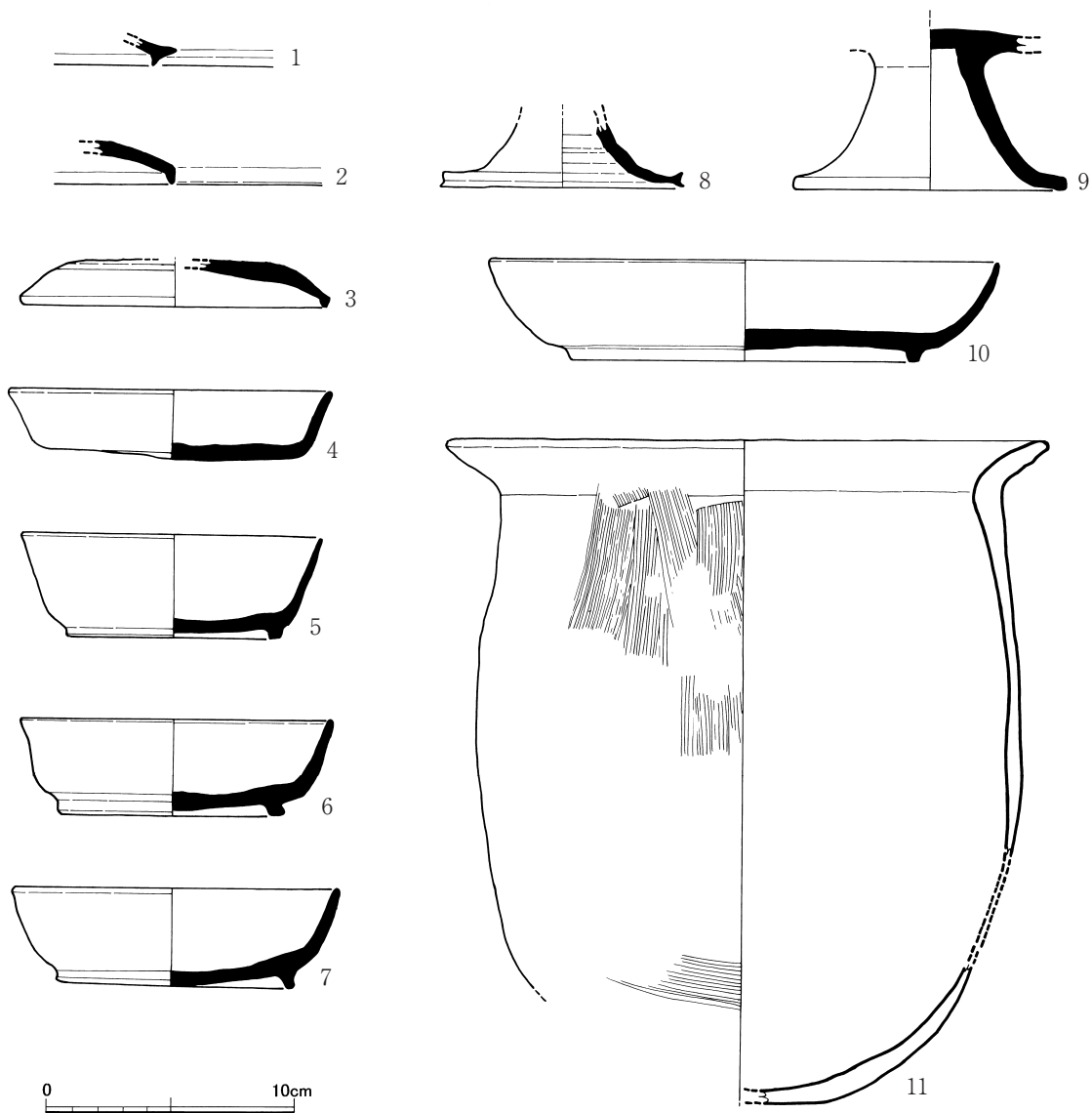


- 1 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土
- 2 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土

- 1 褐色(10YR4/4)粘質土 (炭化物を含む)
- 2 黒色(10YR1.7/1)粘質土 (炭化物層)
- 3 明赤褐色(5YR5/6)土 (焼土ブロック)
- 4 暗赤褐色(5YR3/6)土 (焼土)
- 5 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 (炭化物を含む)
- 6 黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土
- 7 4とほぼ同じ
- 8 6とほぼ同じ

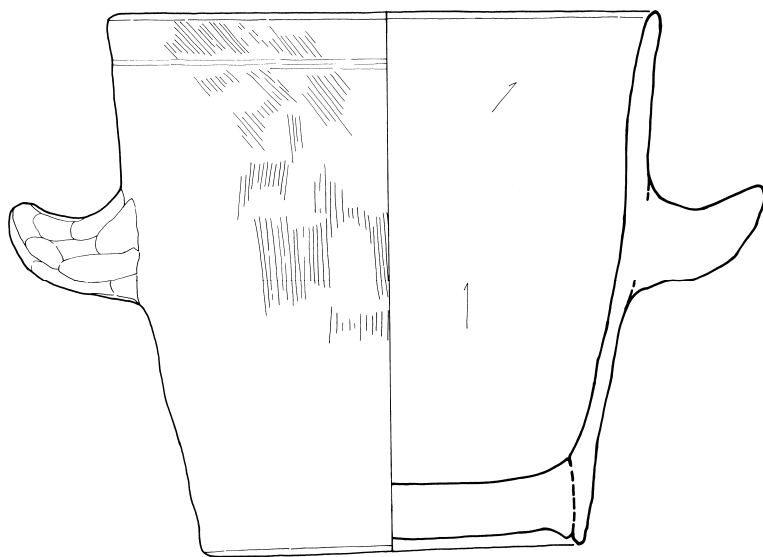
- 1 褐色(10YR4/4)粘質土 (炭化物を含む)
- 2 暗赤褐色(5YR3/6)土 (焼土)
- 3 明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質粘土
- 4 黒色(10YR1.7/1)粘質土 (炭化物層)
- 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土 (炭化物、焼土小ブロック混)
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 (炭化物を含む)
- 7 5+明黄褐色(10YR6/8)シルト質粘土
- 8 にぶい赤褐色(5YR4/4)シルト質粘土
- 9 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土
- 10 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
- 11 8とほぼ同じ
- 12 褐色(7.5YR4/4)粘質土
- 13 赤褐色(5YR4/6)粘質土

第30図 2号住居跡竈・煙道実測図 (1/20)

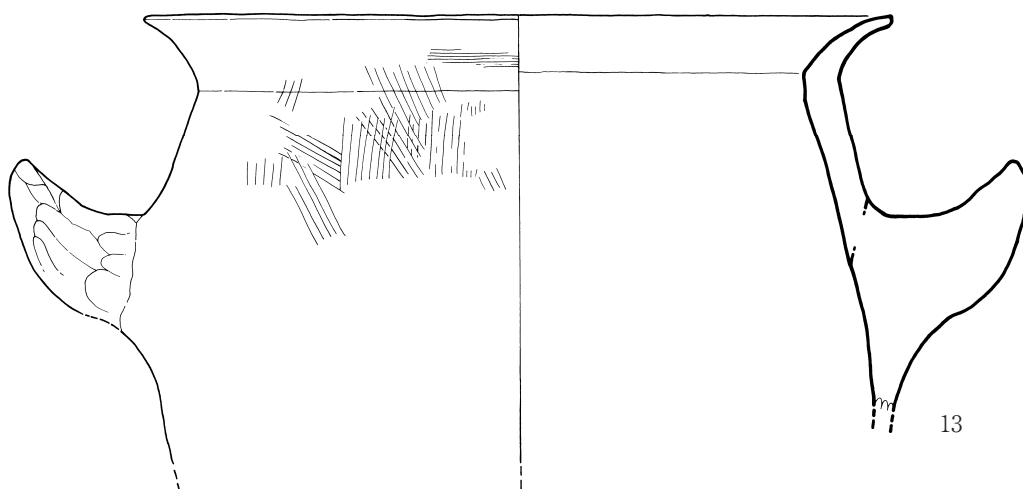
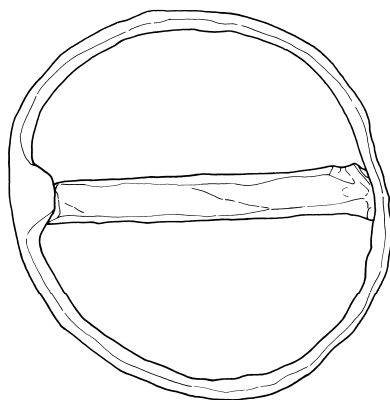


第31図 2号住居跡出土須恵器・土師器実測図 (1/3)

構検出面から床面までの深さ約60cmあり、比較的残りがよい。斜面で山側の東辺に竈があり、煙道が延びる。埋土の堆積状態から住居廃棄後自然に堆積したと考えられる。遺構検出面から深さ25cmの間に須恵器が多く出土している。竈の前面に土師器の甕と甔が転がったような状況で出土した。また、竈の前面床上には炭化物が多くみられた。竈の北側の袖が欠損しているのは発掘調査時の掘りすぎによるものである。竈の下から前面にかけて直径約70cmほどの浅いピットがある。煙道には土師器の甔と甕が傾斜に沿って埋められていたが、煙道が埋まらないように土器で押さえたものと思われる。煙道は住居の床面から39度の角度で立ち上がり、この土師器の甕が据えられたあたりから29度とやや緩やかな角度に変化している。住居床面の西側にある2つのピットは柱穴と考えられるが、これと対になる柱穴を東側に検出できなかった。



12



13

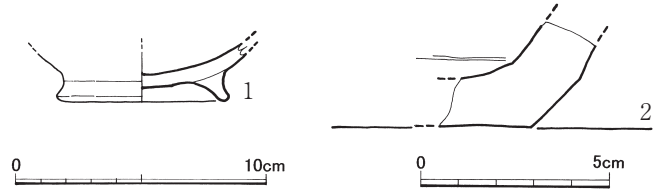


第32图 2号住居跡出土土師器実測図 (1/3)

② 溝

3号溝

3号溝は調査区の東部で4号住居跡を切る。幅80cm、深さ約70cmで、底面の比高差はほとんどない。この溝は現地形の等高線



第33図 3号溝出土土師器・石製品実測図 (1/3・1/2)

と平行でないことから、現地形は後世の開拓によりかなり変化していることが想定される。出土遺物は弥生土器の他、黒色土器の椀や須恵器、土師器細片が出土している。

③ 出土遺物

2号住居跡 (図版13 第31、32図)

第31図1～10は須恵器、11は土師器である。1～3は蓋で、1は口縁部細片である。かえりがほぼ垂直に付く。2、3は身受けのかえりが消失し口縁端部を折り返した蓋である。2は口縁部細片。3は復元口径12.6cm、器高1.9cmである。天井部外面にはつまみがついていた痕跡がある。4は皿で口径12.9cm、器高2.9cmを計る。底部外面はヘラ切り、内面は不定方向のナデ調整である。5～7は高台付の椀で、口縁が直線的に立ち上がる。口径12.2cm、高台径8.9cm、器高4.2cmを計る。7は口縁がやや内湾ぎみに立ち上がる。復元口径13.2cm、高台径9.8cm、器高4.1cmを計る。焼成不良のため軟質で浅黄色を呈する。8、9は高杯で、8は脚部細片で、復元脚裾部径は10.0cmである。裾端部を上、下方向につまみ出している。内面にヘラ記号あり。9は脚部のみ残存し、脚裾部径は11.1cmを計る。10は高台付の皿で、口縁が内湾しながら立ち上がる。復元口径20.8cm、高台径14.4cm、器高4.1cmを計る。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。11は甕で口径24.1cm、器高27.2cm、胴部最大径22.4cmを計る。胎土は石英、長石、雲母を多く含む。胴部に黒斑あり。底部と口縁部の一部を欠損する。

第32図1、2は土師器の甕である。1、2とも煙道から出土した。1は胴部がほぼ直線的で胴部の中央に取手が付く。底部は棒状の粘土帯を張り付けている。調整は、胴部外面はタテハケ、内面はタテ方向のケズリである。口縁部外面は左斜め上方向のハケ目を施している。口縁から約2cm下には口縁と平行に細い帯状の圧痕がある。口径21.4cm、底径15.3cm、器高21.8cmを計る。2は甕に取手をつけた形の甕で、口縁～胴部上半を約1/2残存する。調整は胴部外面がハケ目、口縁部外面はヨコハケで、内面は磨滅が著しいがヘラケズリか。口径29.6cmである。

3号溝 (第33図)

1は土師器椀の底部を約1/4残存し、復元高台径11.6cmである。底部内面の調整はミガキで、内黒の黒色土器。2は滑石製石鍋の底部細片である。内面には鑿で削った痕跡がある。外面には煤が付着している。

(4) 小結

4次調査では主に住居跡を検出した。住居跡の時代も弥生時代から奈良時代と時代幅があるが、主に1～3次調査で検出できなかった弥生時代の住居跡が検出された住居跡の時期は出土遺物から主に中期後半～末である。調査区東側で支丘の尾根上では大南遺跡や大谷遺跡と同様に弥生時代の居住域が存在すると考えられ、4次調査地点はその西端であるといえる。発掘調査終了後に行われた擁壁工事の立会にて、遺跡が北側へ広がることを確認した。また、調査前には対象地の南側で市道から西に自然地形が張り出していると考えていたが、市道面より約4mの深さで土器を多く含む包含層があり、この張り出しは宅地造成の時に切土した土を盛ったものであることがわかった。また、平成20年に行った市道東側での個人住宅建設に伴う試掘調査で、切土により遺構が全く確認されなかったことから、さらに近年の造成によって地形が変化しているといえる。トバセ遺跡と林田遺跡は支丘の尾根と斜面で遺跡名をわけているが、造成による地形の変化を考慮するとほぼ同一の遺跡である。

古墳時代の住居跡の時期は、出土遺物土器から1号住居跡は5世紀前半である。この住居跡からは靴の羽口が出土した。羽口は破片のため、外からの流れ込みであるかもしれないが、1号住居跡は後世の削平により残りがよくないことから、出土遺物はほぼ床面出土といえる。また、鉄器生産に関連する可能性があるものとして、埋土に炭化物を多く含む5号土壙、6号土壙がある。発掘調査時には焼土はあるものの遺構が堅く焼け締まった状態ではなく、鍛冶遺構を想定できるような滓や鉄片がみられなかったことから、土器焼成土壙の可能性を考えた。しかし、これらの炭化物や焼土が生じた原因を想定できる遺物の出土はなかった。そして5号土壙や6号土壙の時期を出土遺物より弥生時代としたが、調査地点が斜面であり、より上位からの流れ込みであることを考慮すると、確実に出土遺物から弥生時代といえるわけではない。また、今回の報告ではほぼ床面から石庖丁や弥生土器が出土したため、3号住居跡を弥生時代の遺構として扱ったが、住居の規模、配置の向きから考えると古墳時代の住居跡である1号住居跡とほぼ同じであるといえる。3号住居跡は調査区外にかかり全部を発掘調査していないため、古墳時代の住居となる可能性もあるのではないかと考えている。

奈良時代の住居跡では2号住居跡の残存状況がよく、煙道を検出することができた。2号住居は埋土中から出土した須恵器にやや時期幅があるが主に8世紀中頃～後半であることから、この頃には廃棄されていたといえる。

IV まとめ

弥生時代の遺構について

周辺の遺跡分布をみると、地形的には樹枝状に入り組む谷以外の支丘上に弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が形成されている。大南遺跡、大谷遺跡が支丘尾根上に住居跡があることをみると、トバセ遺跡においても支丘尾根上に住居跡が形成されると考えられる。これは支丘の斜面にあたる当遺跡において包含層に多量の弥生土器が含まれていることから推測できる。時期的には特に包



トバセ遺跡、林田遺跡、大南遺跡、大谷遺跡遺構配置図 (1/2,000)
 (トバセ遺跡の遺構は検出したすべての溝と竪穴住居跡と掘立柱建物跡をトレースしている)
 引用文献

佐々木隆彦編 (1976) 「大南遺跡調査概報」春日市文化財調査報告書第4集
 佐土原逸男編 (1979) 「大谷遺跡」春日市文化財調査報告書第5集

含層の堆積が多く見られた2次調査において、弥生時代中期末の弥生土器を多く包含していたことから、トバセ遺跡の集落の主な時期は中期末と思われる。トバセ遺跡の東側の谷部を挟んで所在する大南遺跡ではV字溝があり、この溝は高辻E遺跡へと続き、須玖遺跡群を囲む環濠と考えられる。このように環濠のラインを想定すると、トバセ遺跡、大谷遺跡は環濠の外側に位置することになる。大谷遺跡以南では弥生時代の遺跡分布が希薄となり、地形的にみても春日丘陵を南北に分断する小さな谷が入る。遺跡の分布や地形的にみても大谷遺跡の外側（南側）ではなく、大谷遺跡を囲まない位置に環濠が掘削されていると考えられる。

トバセ遺跡周辺の集落は須玖遺跡群において大谷遺跡にみられるように、丘陵の高い部分を削平して平坦部を広げる大規模造成が行われている（註1）。この大規模な造成について工事を計画し掌握した有力者の存在が想定され、これらの有力者によって多数の人員が動員された可能性を指摘されている（註2）。また、春日丘陵上の集落の動向について小澤氏の研究があり、この中で小澤氏は環濠について、環濠はこれに囲まれて生活する人々の間の結合力を高めるものであり、この環濠を埋めることは環濠内部に居住する集団の結合力が弱まったと考えられ、従って環濠が埋没する中期末～後期初頭に集落から周辺に人々が分散していったと推測している（註3）。トバセ遺跡1～3次調査で弥生時代の溝が確認されており、出土土器から中期末に埋没し始めたと考えられる。後期になると明確な遺構はみられないが、後期の土器は多くないが出土している。また、大谷遺跡においても中期後半の住居跡が主体であるが、一部、中期末から後期前半にかけての土器もみられる。大南遺跡の環濠から出土した土器の時期も中期から後期後半と時期幅が広い。集落の消長やその背景を検討する上で大南遺跡の環濠が掘られた時期が重要になるのではないかと。再度、大谷遺跡、大南遺跡の整理が必要であり、トバセ遺跡の位置づけにつながるものと考えられる。現段階ではトバセ遺跡が所在する支丘の西斜面しか調査が行われていないため、林田遺跡・トバセ遺跡がある支丘のみを取り囲む溝になるか、大南遺跡のV字溝とあわせて二重の溝になるかは断定できない。支丘がつづく大谷遺跡の南側へと延びる溝になることも仮定し今後の調査に望みたい。

古墳時代の遺構について

1～4次調査にかけて鉄器、鉄器未製品が出土している。包含層からの出土のため時期が特定できないが、特に鉄斧が複数出土している。4次調査の1号住居跡からは韃羽口が出土していることから、鉄生産に関連する遺構が存在する可能性が高いといえる。4次調査の1号住居跡と同時期の遺構として、2次調査で検出した3号住居跡がある。この住居跡は一辺が7×6.7mと大型で屋内土壌が4ヶ所ある。出土遺物には小型丸底壺、高杯などの土師器と砥石、鉄鏃の柄と思われる鉄器などがある。住居跡の中心には炉跡があり、ピット内が赤く焼け締まっていることと炭化物を充填した状況であった。ただ、鉄器生産に関連する道具や鉄滓などの出土がないため、トバセ遺跡において5世紀前半に鍛冶が行われていた可能性を指摘するにとどめたい。

奈良時代の遺構について

トバセ遺跡における奈良時代の遺構は、2次調査で奈良時代の竪穴住居跡を2棟検出しており、小型で長方形を呈する。また、溝からヘラ書き土器が出土し、牛頸窯跡群に含まれるハセムシ窯跡群、井手窯跡群出土品に類例があり、官製品の可能性を指摘している（註4）。4次調査では煙道をもつ竪穴住居跡を検出した。断定はできないが、1次調査の1号掘建柱建物跡は2次調査で検出した竪穴住居跡と建物の向きがほぼ同一であることから、奈良時代の遺構と推測される。当遺跡において、奈良時代の遺構は密ではないが面的にみられる。

周辺の遺跡をみると、奈良時代の集落としては、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、中ノ原遺跡などがあげられる。これらの遺跡の立地は春日丘陵と御笠川との間で、南は牛頸川によって開析している。土質は火山砕屑物が堆積し、中位段丘面にあたる。この中位段丘面も小河川によって開析され、八ツ手状に小さな谷が入る。春日丘陵と雑餉隈遺跡などが所在する中位段丘面間の低位段丘面では遺跡はほとんど確認されていないが、大荒遺跡、下大荒遺跡などがあり、主に水田として利用されていたと考えられる。いずれも官道西門ルート沿いに位置するといえる。特に煙道を持つ住居が多数みられる。

トバセ遺跡2次調査でほぼ同時期の住居跡を2軒検出しているが、2次調査の住居跡が長方形プランであるのに対し、4次調査の2号住居跡はほぼ正方形プランである。雑餉隈遺跡群、南八幡遺跡群でも煙道をもつ竪穴住居跡が多数確認されている。これらの遺跡群の様相について「南八幡、麦野、雑餉隈遺跡群における7世紀末～8世紀の竪穴住居跡、掘立柱建物跡から、同時期の一大集落が形成されていたことがうかがえる。その反面、出土遺物には食器以外の遺物はほとんどなく生活感が乏しいことを指摘し、9世紀になると遺構は継続しないことから大宰府や水城などの国家的施設の建設や修理などに従事させるために集住させたという推測も頷けよう」（註5）としている。トバセ遺跡の南850mの位置には大土居水城跡もあり、小高い支丘上にあるトバセ遺跡も交通の要所に位置するともいえる。そうした面からこの両遺跡群を比較すると、雑餉隈遺跡群、南八幡遺跡群では一辺3～4m以下の小型住居跡では竈を張り出して造っている。これは狭小な空間を補うための工夫と考えられているが、トバセ遺跡では住居跡は少ないものの、竈が張り出す住居跡はみられない。今後、同時期の調査例の増加を待ち、再度検討したい。

（註1） 渡辺正気 平田定幸 吉田佳広（1995）「第二章弥生時代 第三節春日市中部の遺跡」『春日市史』春日市史編纂委員会

（註2） 中園聡（2004）「第8章 「都市」・集落と社会」『九州弥生文化の特質』（財）九州大学出版会

（註3） 小澤佳憲（2000）「弥生集落の動態と画期—福岡県春日丘陵域を対象として—」『古文化談叢』第44集

（註4） 吉田佳広 森井千賀子編（2006）「トバセ遺跡」春日市文化財調査報告書第45集

（註5） 力武卓治編（1999）「南八幡遺跡群 第8次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第602集

图 版



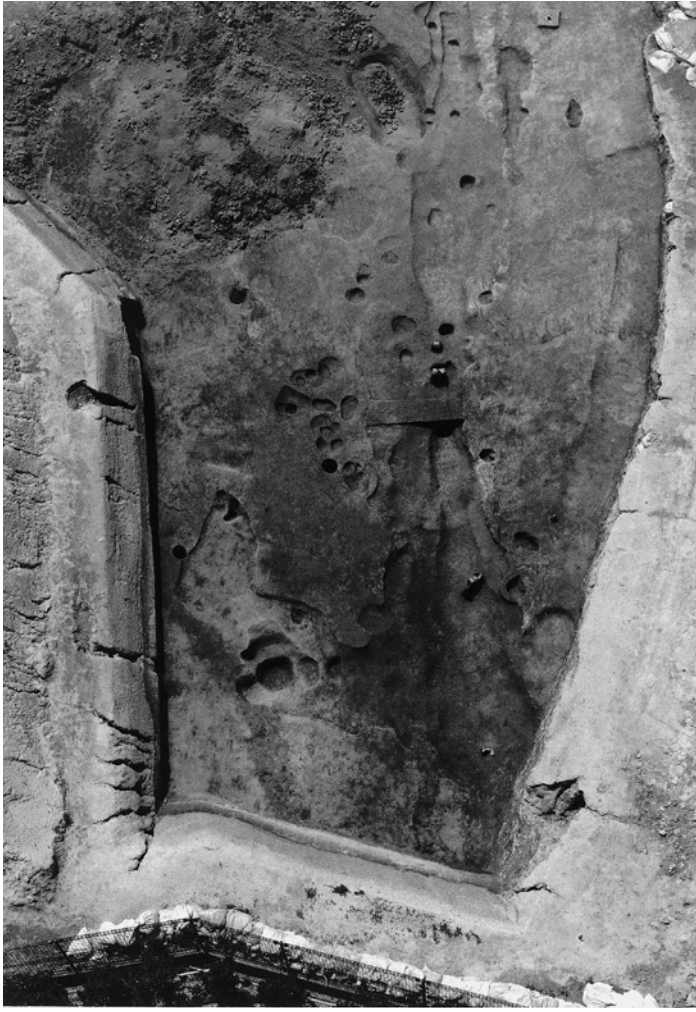
1 トバセ遺跡3次調査
調査区東部（第1面）全景（北から）



2 調査区中央部（第1面）全景（北から）



3 調査区西部（第1面）全景



(左) 1 調査区中央部 (第2面) 北側全景 (北から)

(右) 2 調査区中央部 (第2面) 南側全景 (北から)



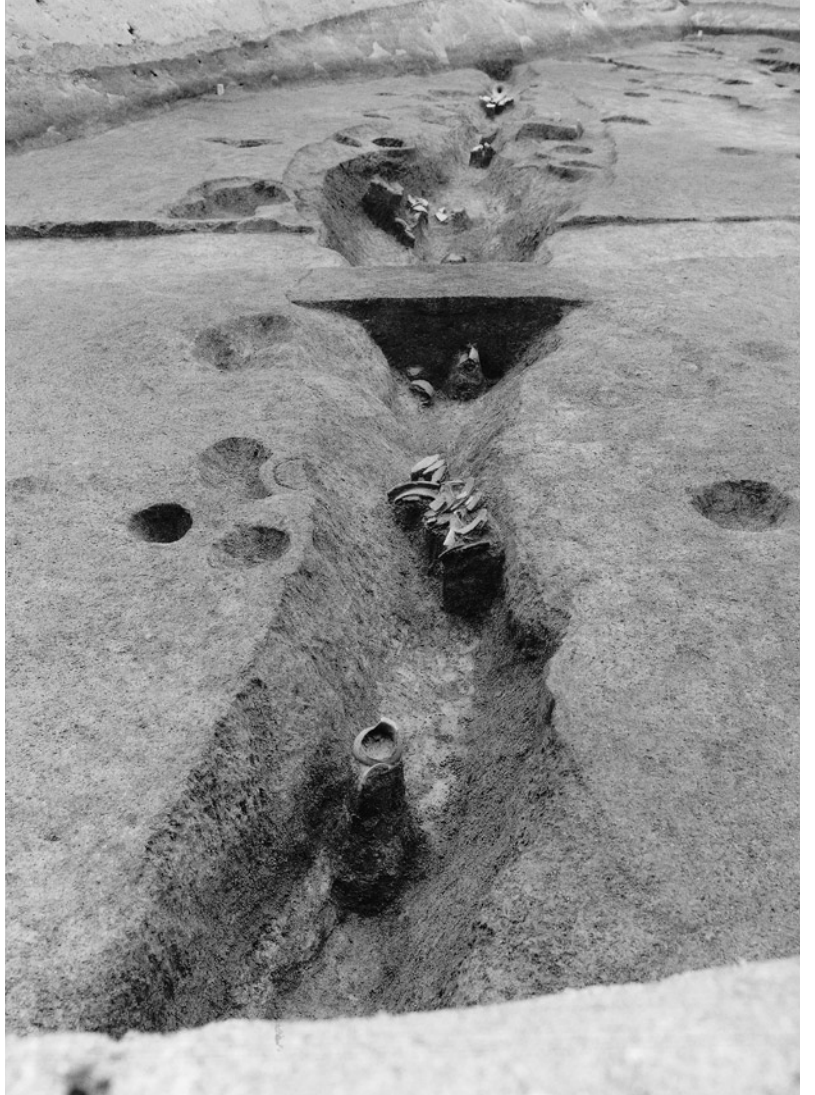
3 調査区西部 (第2面) 全景



1 1号土壙（南西から）



2 1号溝弥生土器出土状況



3 1号溝全景（南から）



图9-1

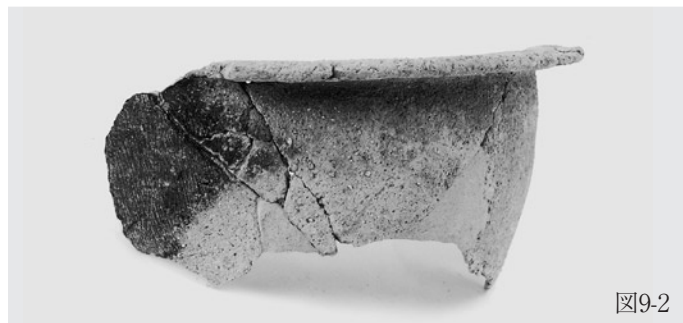


图9-2



图9-5



图9-6



图9-7



图9-8



图9-10



图9-11



图9-12



图9-15



图9-17



图10-1



图10-8



图10-5



图10-9



图10-7



图10-15



图10-10



图11-8



图10-16



图11-20



图11-22



图11-19



图12-7



图12-19



图13-1



图13-2



图13-4



图13-3



图13-5



图13-7



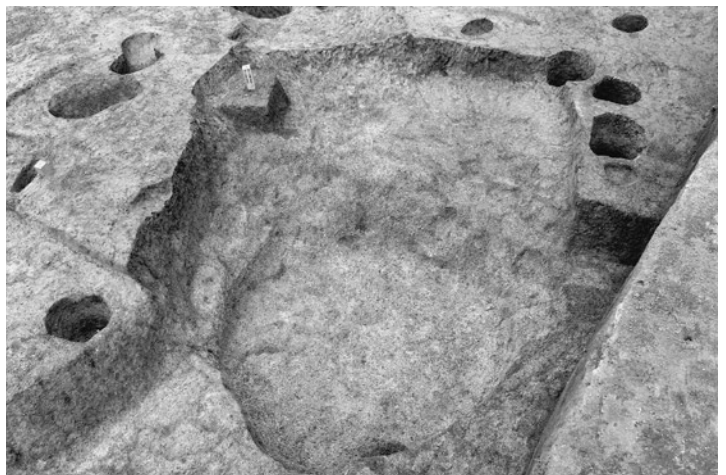
图13-8



1 トバセ遺跡4次調査全景



2 3号住居跡(北から)



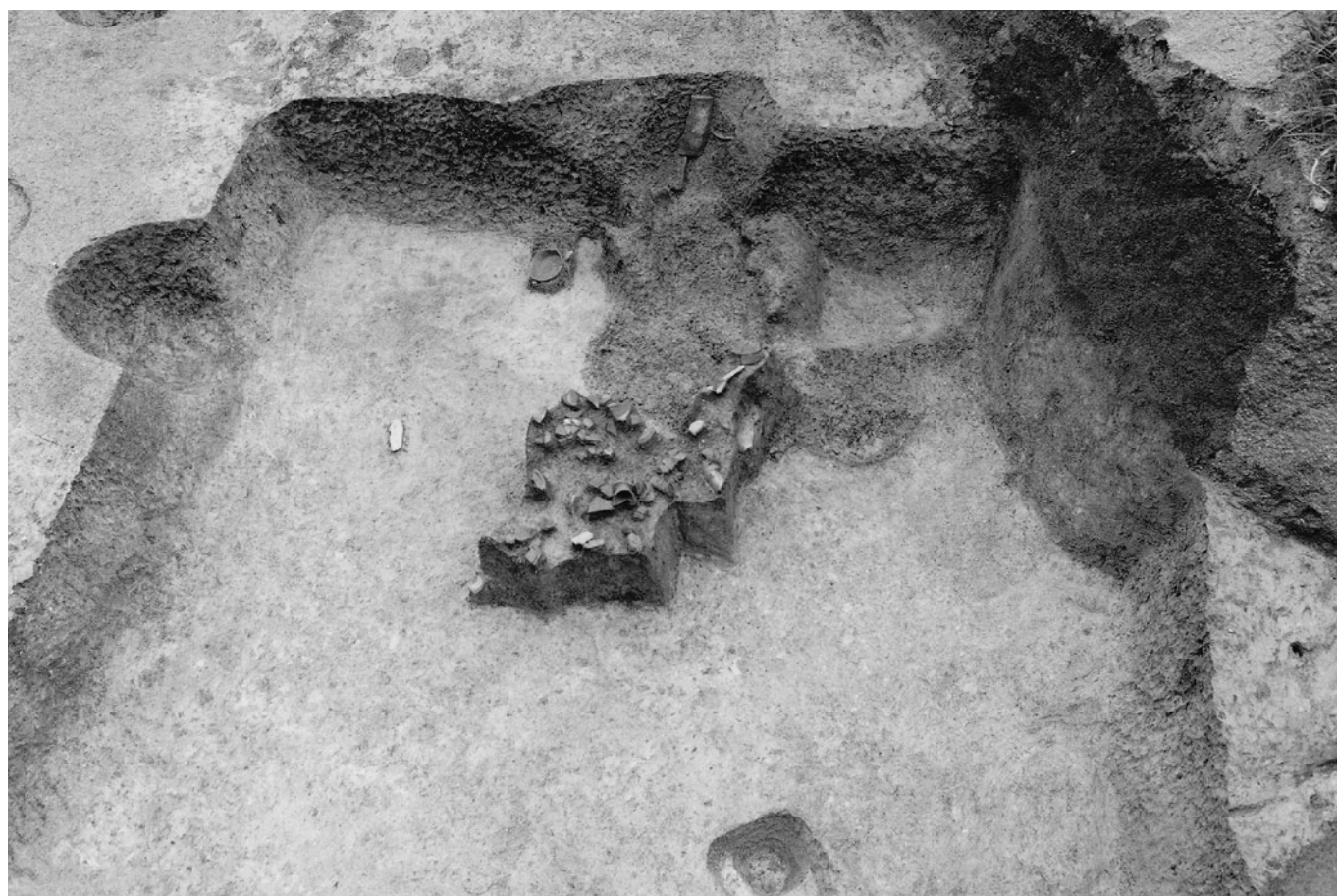
3 3・4号土壌(北東から)



4 1号住居跡
(北から)



1 2号住居跡完掘状況（西から）



2 2号住居跡土器出土状況（西から）



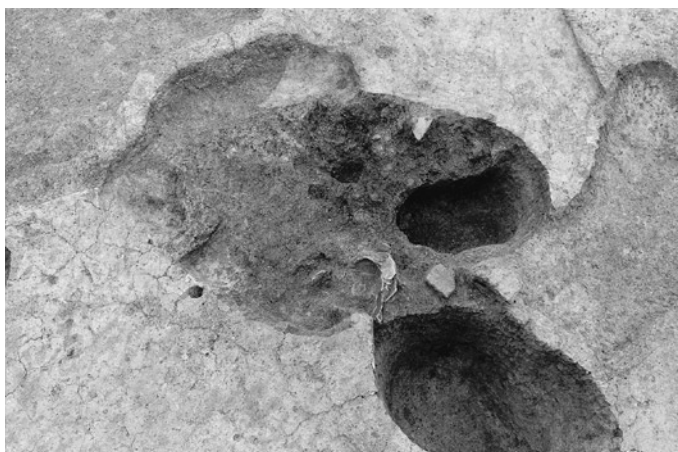
1 2号住居竈検出状況（西から）



2 2号住居煙道検出状況（西から）



1 5号土坑 (南西から)



2 6号土坑 (西から)



3 調査区近景 (北東から)



図17-11



図17-14



図17-15



図17-17



図18-2



図19-1

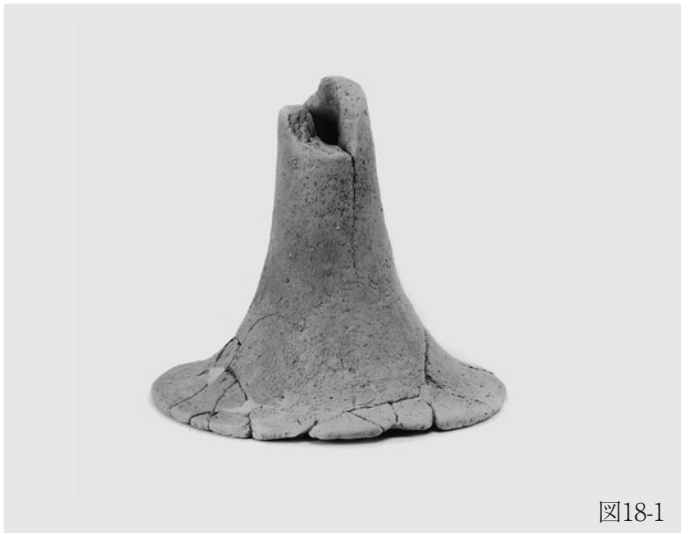


図18-1



図19-3



図19-3



图20-1



图20-2

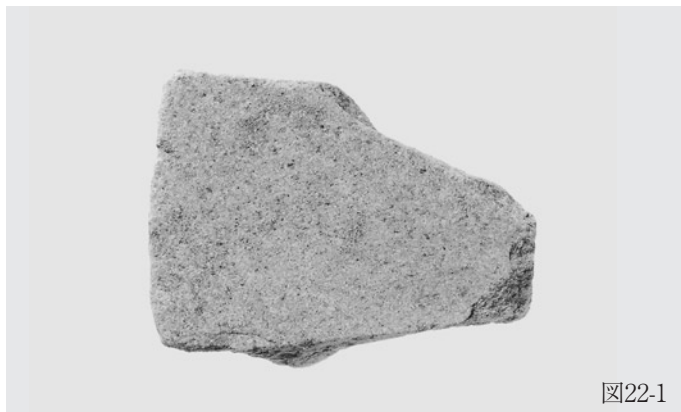


图22-1



图24-1



图24-7



图21



图22-3

图22-2



图24-2



图24-4



图24-5



图24-6

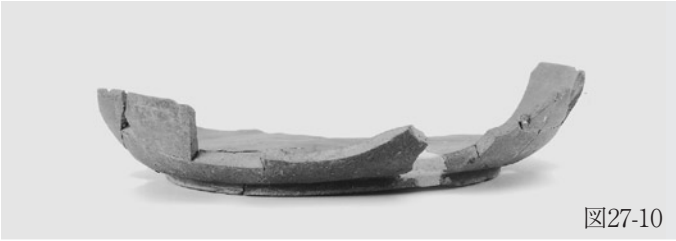


图27-10

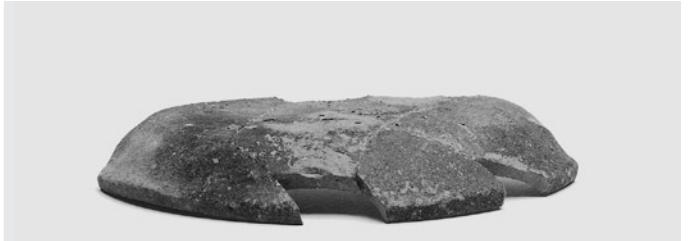


图27-3



图27-7



图27-6



图27-9



图27-5



图28-13



图27-1



图27-1



图28-12

2号住居跡出土土師器、須恵器

報 告 書 抄 録

ふりがな	とばせ いせき 2								
書名	トバセ遺跡2								
副書名	福岡県春日市大谷所在遺跡の調査								
巻次									
シリーズ名	春日市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第55集								
編著者名	森井千賀子								
編集機関	春日市教育委員会								
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111								
発行年月日	2009年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村番号	遺跡番号					
トバセ遺跡 第3次調査	福岡県春日市大谷 3丁目106-1		40218		33° 31' 36"	130° 27' 02"	1998.4.6) 1998.6.9	310m ²	緊急発掘 調査
トバセ遺跡 第4次調査	福岡県春日市大谷 3丁目69		40218		33° 31' 38"	130° 27' 02"	1998.10.6) 1998.11.6	117.49m ²	緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
トバセ遺跡 第3次調査	集落	弥生	溝状遺構		弥生土器		弥生時代中期末の溝を確認した。		
トバセ遺跡 第4次調査	集落	弥生) 奈良	竪穴住居跡		弥生土器、土師器、 須恵器		鉄器鑄造関連遺物が出土した竪穴住居跡または周辺に工房跡が存在する可能性がある。		
要約	弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡である。春日丘陵上にある須玖遺跡群の南西端に位置する。弥生時代の遺構では住居跡と溝、古墳時代の遺構では住居跡、奈良時代の遺構では住居跡などを検出した。支丘の西斜面にあり、包含層の堆積状況から集落の中心は支丘上の林田遺跡に広がると考えられる。								

トバセ遺跡 2

春日市文化財調査報告書
第 55 集

平成21年3月31日

発 行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印 刷 大道印刷株式会社
春日市日の出町6丁目23番地